

平成25年度 研 究 集 録

川越市教育委員会委嘱学校研究



川越市教育委員会

挨拶

川越市教育委員会教育長

伊藤 明

平成25年度川越市教育委員会委嘱学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。委嘱学校研究2年次の8校、1年次の8校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

さて、社会の急速な進展の中、児童生徒の自立と健やかな成長を図るためには、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力の知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことが益々重要となります。

このことを踏まえ、川越市教育委員会では、本市教育振興基本計画の基本理念を「生きる力と学びを育む川越市の教育」として、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、実効性のある様々な取組を推進しております。

こうした中、委嘱研究校では各教科、特別活動について積極的に研究を推進していただきました。自校の実態を的確に把握した上で研究主題を設定し、教育活動充実への様々な手立てを講じ、着実に授業実践を重ねてこられました。

各学校の研究成果は、学力や体力の伸長、望ましい人間関係の構築など、児童生徒のよりよい変容となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の8校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、ここに紹介した委嘱学校研究の成果を、指導計画の見直しや指導方法の工夫改善に積極的に活用されることを期待しております。そして、生きる力を育むことを目指し、自ら学び自ら考える子どもを育成するための取組を一層推進していただきたいと思っております。

結びに、委嘱研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。挨拶といたします。

研究主題

「人とのかかわりを大切にし、主体的に活動できる児童の育成」 ～言語活動の充実を目指して～

川越市立川越小学校

研究のポイント

- 国語の授業で身に付けた言語力を他教科等に広げ、子ども同士のかかわりを通し「伝え合う」コミュニケーション能力の育成を目指す。
- 理科学習の場で、効果的な言語活動を設定し、授業改善を行うことで論理的な思考力の育成を目指す。
- 教師の創意工夫を引き出していくために、プロジェクトチームを再編し、リーダーを中心に主体的な実践研究を進める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

平成22・23年度の国語科研究を継続しながら、国語の学習で身に付けた言語力を、日々の生活や他教科等の中で活かしていけるようにしていく。特に、理科学習では「言語活動の充実」を目指していく中で科学的な見方や考え方を養っていく。

(2) 研究主題設定の理由

研究を始めた平成22年度当初の本校の児童の実態として、「自己表現が苦手、自分の言葉でうまく表現することができない」ということがあげられていた。このことから国語科を中心に研究を進めてきた。国語の授業の中で「情報の取り出し→解釈→話し合い→まとめ・評価」や「意見交流」などの授業スタイルを定着させることができた。また、プロジェクトチームを中心に児童の言語感覚を磨く取組も実践してきた。2年間の研究は国語の授業改善だけでなく各プロジェクトとしても着実な成果を得ることができた。

さらに、これらの取組の成果を他教科等でも生かしていくことを主眼に本テーマを設定し、特に理科の授業改善に取り組み、論理的思考力の育成を目指した。



(3) 研究組織



2. 研究の内容

本研究については、前ページのような構想で取り組んできた。国語科授業研究では「読むこと」を中心にすえた。また、言語環境を整えるために「3つのたがやし(音読・読書・視写)」に取り組んできた。話し合いのスキルを高めるために「お話道場」の充実を図ってきた。これらを基本として活かしながら、本年度は下記のような仮説を設定し、「言語活動の充実」を他教科等にも広げていくことができると考え、理科における論理的な思考力を高めていくことを視点に取り組んだ。

仮説1

理科の目標に合わせた、効果的な言語活動の設定と授業改善を行うことで、論理的な思考力が育ち、話し合い学び合う力が高まるだろう。

仮説2

児童が進んで思考・表現し、話し合うための手立ての工夫を図れば、話し合いのスキルが身に付き、学び合う力が高まるだろう。

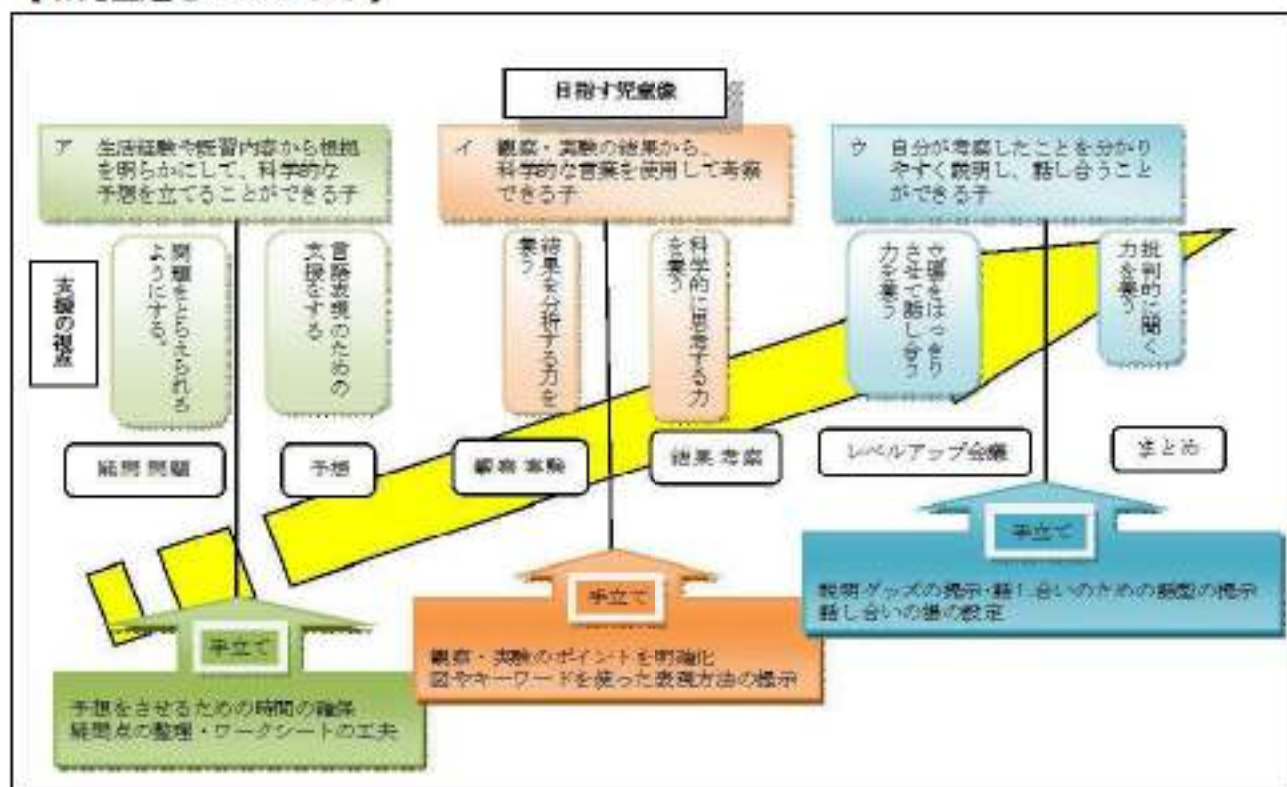
仮説3

国語の指導を通し、語彙を増やし、言葉による表現力を身に付けることで話し合い学び合う力が高まるだろう。

そして、仮説1に関しては①理科のねらいと各単元で身に付けさせたい力の明確化(次ページ「研究主題とのかかわり」参照)②理科の授業研究を通し充実と改善に努める。仮説2に対しては、①各教科で身に付けた知識・技術を活用する学習活動(言語活動)の充実②各教科毎の目指す児童像の設定③学年の発達段階に合わせた評価規準の作成を進める。仮説3に関しては、①国語科の授業の中で、記録、要約、説明、論述、発表、討論、批評、比較、話し合いに必要な言語力を育てる単元の洗い出しと各学年

の発達段階に合わせた指導法の改善に取り組む。下図は、理科の学習と研究主題との相関図である。

【研究主題とのかかわり】



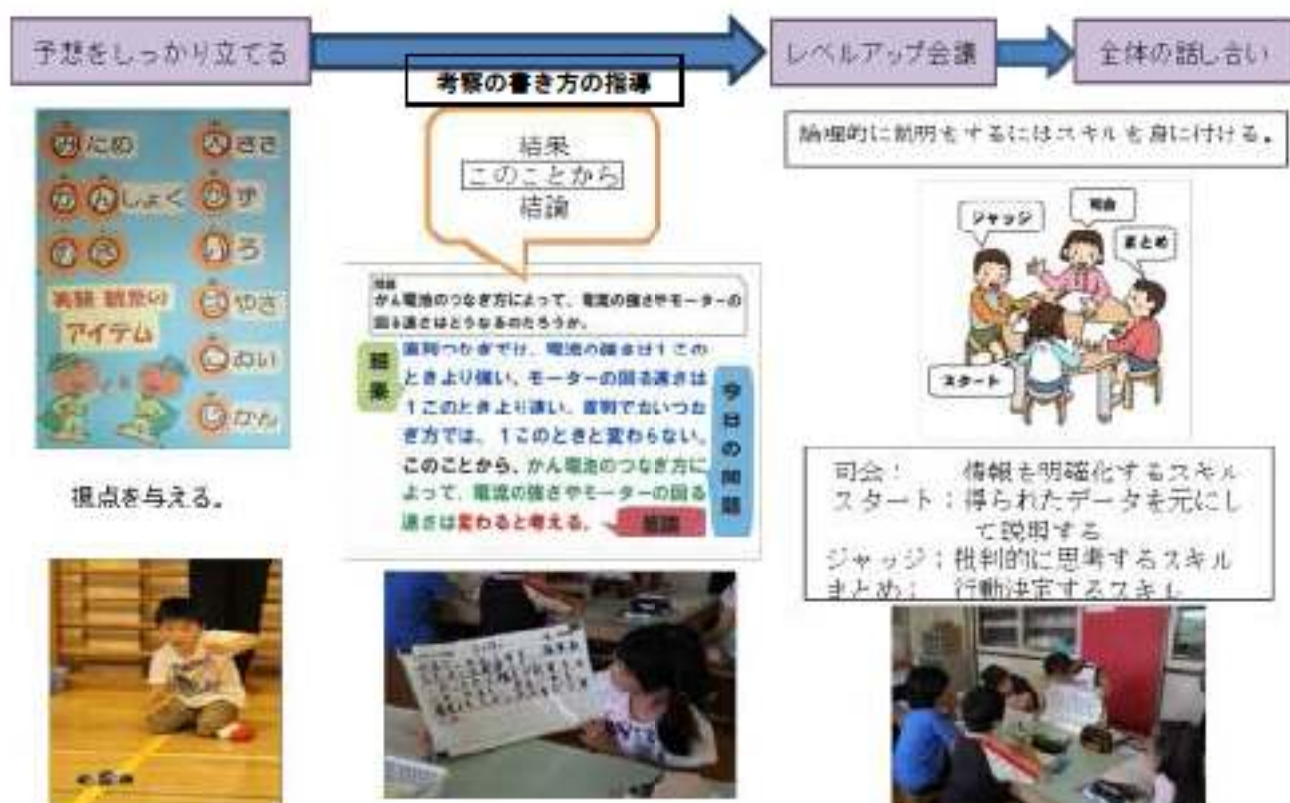
3 実践事例

仮説1については、理科プロジェクトを中心として取り組んだ。理科授業を進めていく上で、3つの支援の視点で取り組んでいった。1つ目は視点を与え、科学的な予想を立て、それを表現する場を確保すること。2つ目は科学的な言葉を使用して考察し、きちんと伝えられる体験を通して、考察文の書き方を指導すること。3つ目は自分が考察したことを分かりやすく説明し、話し合うクリティカルシンキングのスキルを身に付ける場としてのレベルアップ会議を設けること。レベルアップ会議では、4人グループ各人の役割を通して、情報の明確化・論理的説明・批判的思考・行動決定のスキルを身に付けさせていくようにした。

また、環境整備面では、理科室に授業の流れを掲示し視覚的にとらえられるようにした。さらに、教師が学習単位を通して言語活動を意識できるように言語活動のポイントを洗い出したシートを作成した。児童が理科に興味をもてるように第2理科室を活用して実験ブースを設置し、休み時間にルールを守りながら自由に体験できるようにした。

仮説2については、お話プロジェクト、わくわくプロジェクトを中心として取り組んだ。児童が進んで思考・表現し、話し合えるようになるための手立てとして、月1回、朝学習の時間にお話道場を設けて取り組んできた。2つ目は、他教科でのクリティカルシンキング、すなわち、改善・充実のための話し合いの場を計画的に設けた。役割分担し討議することで、考えを深め合う話し合いの力を付けることを目指し取り組んでる。また、特別支援学級では、コミュニケーション能力が高められるよう、皆に伝えたり人とかかわったりする場を意識的に設定し、実態に合わせた支援の方法を工夫し取り組んできた。

仮説3については、よむ文プロジェクトを中心として言語力の育成を目指し取り組



んだ。理科の土台となる言語力を育成するには、国語科ではどの単元で重点的に取り組むのがよいか、まず、洗い出しを行った。そして、自分の考えや観察したことを書くこと・自分の考えを分かりやすく伝えることに重点を置き授業研究を進めた。さらに、読書の推進では、家庭読書に力を入れ、読書マラソンカードと一緒にファイルし意欲付けを図ってきた。また親子ふれあい読書やブックリストの活用の取組を継続してきた。音読では、毎日の音読カードによる家庭学習だけではなく、学校公開日に発表の場を設け、児童が達成感を感じられるよう取り組んできた。最後に、文ぶんタイムで月2～3回朝学習の時間に視写を行ってきた。言葉を正確にとらえ、会話文も正確に書けるよう取り組んでいる。

4 今後の成果と課題

【成果】

- ・(仮説1) 各学年の授業研究を通して、単元計画や発問、板書、ワークシート等の工夫がみられ、児童の学習意欲が高まった。また、児童の思考力を高めるための教師の見方を研修で深めることができた。
- ・(仮説2) 情報を書き写すだけでなく児童から自発的な意見が出て、活発な話し合い活動ができるようになった。また、話し合いのパターンが定着し、クリティカルシンキングを意識したまとめ方が身に付いてきた。
- ・(仮説3) 国語科の授業研究を通して、単元を貫く言語活動の研究を進めたことにより、話す・聞く力、書く力が高まってきた。また、プロジェクトチームを再編しながら、文ぶんタイムを継続してきたことにより、書く力が向上した。

【課題】

- ・理科の学習では、考察にかかわる時間を確保していくためにも効果的な実験方法の研究をさらに進めることが必要である。
- ・定型文を準備して話し合いを進めたが、司会の児童によって話し合いが左右されてしまうので、どの児童にもグループをまとめていくだけの力量を身に付けさせるための支援を一層工夫していく必要がある。

研究主題

「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」

～実感を伴った理解を深める理科・生活科・生活単元の指導の工夫～

川越市立中央小学校

研究のポイント

—実感を伴った理解を深める—

- 目的意識をもった観察や実験、科学的な体験、自然体験などの具体的な活動を多く取り入れることで、自然の事物・現象に対する楽しさを味わうことのできる児童の育成に取り組む。
- 単元や授業の導入を工夫し、多様な学習形態を取り入れることで、自ら問題を見だし、解決しようとする児童を育成する。
- 生活と結びついた授業展開をしていくことで、実生活とのつながりを意識できる児童を育成する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

「実感を伴った理解を深める」ことを研究の大きなねらいとしている。

本校は昨年度より、理科・生活科・生活単元の研究に取り組んでいる。次の(2)に記した本校の実態から、まず自然の事物・現象に対して興味・関心をもたせていくために、具体的な体験活動や生活との結びつきを意識させたり、授業の導入を工夫したりするなど、実感を伴った理解を深めていけるような授業改善、環境整備を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校は、市街地に立地しており、日々の生活の中で自然に触れる機会が少なく、体験等を通して実感を伴った理解を深めることが難しい。また、アンケート調査から、動物や虫が苦手という児童も2割にのぼる。さらに、標準学力検査の理科の結果においては、偏差値が52～53と他教科の偏差値53～56に対して低い実態もある。

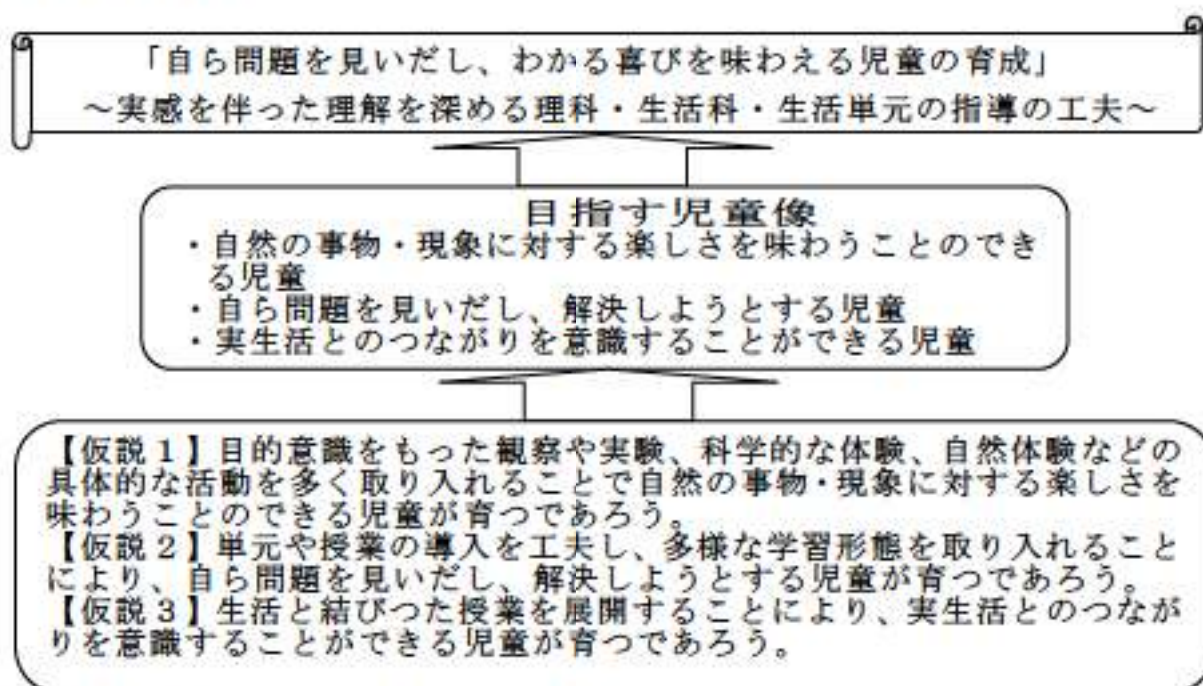
そこで、研究主題を「自ら問題を見だし、わかる喜びを味わえる児童の育成」副題を「実感を伴った理解を深める理科・生活科・生活単元の指導の工夫」として、児童の自然科学に対する興味・関心を高めるような体験的な学習を取り入れた指導の在り方や環境整備を進め、実感を伴った理解を深め、わかる喜びを味わえる児童を育成していきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の主な手立て



【仮説1】 についての手立て

- ・観察や実験、栽培、飼育、ものづくりなど、児童が具体的に活動できる場を確保する。
- ・一人一実験を推奨し、児童が積極的に活動できるよう、観察や実験時にはできるだけ多くの実験器具や具体物、視覚支援教具を準備する。
- ・仮説を設定し、児童が主体的に実験方法を計画する学習を展開する。

【仮説2】 についての手立て

- ・単元及び本時の導入時に、「面白そう」「何でだろう」といった半知半解のものを与えるなど、児童が知り得る知識と、経験とのズレを感じさせるような事象提示を行う。
- ・思考の外化を促すために、予想・考察で用いる文型を作成する。
- ・ペアやグループでの活動を積極的に取り入れ、学習に変化をつける。

【仮説3】 についての手立て

- ・児童の興味・関心を高めていくことができるような環境整備を進める。
- ・観察や実験時には、実生活との結びつきを意識させていくために、身近な素材を取り上げるようにする。

(2) 研究授業の実施

① 研究発表会（10月25日実施）

- ・第2学年 生活科「みんなで出かけよう」
- ・第4学年 理科「もののあたため方」
- ・第5学年 理科「もののとけ方」
- ・特別支援学級 生活単元「からだ探検隊～ぼくの体、どうなってるの？」



- ② 校内研究授業（1学期実施）
 - ・第1学年 生活科「きれいにさいてね たくさんさいてね」
 - ・第3学年 理科「風とゴムのはたらき」
 - ・第6学年 理科「ヒトや動物の体のつくりとはたらき」
- ③ 公開授業（研究発表会以降実施）
 - ・各学年で実施（7回）

3 実践事例

(1) 授業研究部

① 1時間の授業展開の明確化

黒板掲示物を作成したり、ノート指導を充実させたりしながら、1時間の授業の流れの共通理解を図り、科学的な思考を伸ばしていくために、課題解決学習を徹底した。またその中で、実験や観察だけでなく、身近な事柄を取り入れた「導入」の工夫や、自分の言葉で学習を振り返る「考察」の方法についても検討を重ねた。

② 予想・考察で用いる文型を作成

児童が予想や考察を考える際の思考の外化を促すために、予想・考察で用いる文型「こんな言葉で書いてみよう」を作成した。

③ 授業アイデアボードの設置

日常の授業におけるアイデアを共有していくために、職員室にアイデアボードを設置した。ボードを基にしながら、さらなる授業の工夫・改善を図っていくようにした。

④ 視点をもたせるスタンプの作成

五感を中心とした様々な角度から実験・観察の視点をもたせるために、全学年共通に活用できるスタンプを作成した。日々のノート指導の中で積極的に活用していくことで、評価の蓄積ができるようにした。

こんな言葉で書いてみよう!

【予想文型】
 だと思います。なぜなら だからです。
 ※理由をはっきりさせながら、予想できるようにしましょう。
 ※推かめる方法も考えられると、さらにいいです。

【考察文型】
 となりました。このことから、 ということが分かります。
 ※書などに記録した内容も、次に書き出すことが大切です。

【予想・考察・考察のつなぐ文型】
 予想では、 ですが、実際は、 になりました。
 ※思ったこと、思ったことが付け加えられると、さらにいいです。

この中で考えたり、思ったことは、書いてみることで、次に活かしたり、新しい発見が期待できます。

予想・考察で用いる文型



視点をもたせるスタンプ

(2) 環境整備調査部

① 外水槽の整備

長年放置され、使用されていなかった理科室前にある段型外水槽について昨年度から整備をし、活用を始めた。ザリガニなど身近な生物を水槽に入れ、児童が直接触れあうことができるようにして、自然に対す



る興味・関心を高めていくようにした。

② 学習掲示物の作成

児童が授業中に見たり、確認したり、復習したりすることができるような掲示物を作成した。理科では特に、観察・実験器具の使い方や実験中の注意点を主に作成し、日々の学習が安全に行われ、かつ、充実するようにした。



理科室の掲示

③ 本校児童の実態調査の実施・分析

自然科学に関わる興味・関心を問うものを中心に、生活科用、理科用の2種類のアンケートを準備し、昨年度に引き続き全児童を対象に調査を行った。

④ 樹木プレートの修繕

昨年度、校内にある樹木30種類以上に、クイズ形式の樹木プレートを付けた。取付用の紐が切れたものや、プレートが傷んだものを修繕した。

(3) その他の取組

① 県立川越女子高等学校との連携

文部科学省からSSH（スーパーサイエンスハイスクール）に指定されている、県立川越女子高等学校の協力を得て、夏季休業中に「わくわく科学教室」や「教員研修会」、クラブ活動における交流を行った。

② うさぎふれあい広場の整備

うさぎが自由に動き回ることができる「うさぎふれあい広場」を整備し、児童が楽しくうさぎと触れ合えるようにした。

③ 学級園の積極的な活用

自然を身近に感じることができるよう、学級園を整備し、積極的に活用していくようにした。理科や生活科の授業で使用する植物だけでなく、家庭科など他教科との関連も図りながら野菜作り等も行うようにした。

④ 理科朝会の新設

児童の理科への興味・関心を高めるため、年間3回の理科朝会を新設した。これまでにアルコールの燃焼実験や科学体験の報告会などを行ってきた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・目的意識をもった観察や実験、科学的な体験などの具体的な活動を取り入れたことで、児童の興味・関心を高めることができた。
- ・単元や授業における導入を工夫したことで、問題を主体的に解決しようとする児童が増えた。
- ・環境整備により、身近な自然に主体的に関わるようになった。

(2) 課題

- ・年間指導計画を見直し、評価方法についての研究を深める。
- ・実生活で生かせる知識として身に付けられるような指導法を模索していく。
- ・今後も近隣の大学や高校との連携を図り、児童の興味・関心を喚起していく。

「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」

～器械運動系を中心とした体育科指導法の研究～

川越市立仙波小学校

研究のポイント

- 仲間と見合い、励まし合い、教え合い、認め合うという「支え合い」の中で、技能・体力・保健的实践力の高まった「躍動する」児童の育成を図る。
- 児童の興味・関心を抱かせる運動、成功体験の積み重ねによる自信の獲得、安全能力の習得、身体支配の操作能力習得による体力の向上、美しさの追求による児童の心的成長、仲間との見合い・教え合いという視点から、器械運動を重点領域として研究を行う。
- 体育科授業の質の向上、運動の生活化、保健学習・健康に関する取組の充実、新しい教具の開発等による環境の整備の面から研究主題に迫る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

仲間と見合い、励まし合い、教え合い、認め合うという「支え合い」の中で社会性を育てていく。そして、仲間との学習を通して、一人では決してできない、自分の動きを仲間に見てもらい、アドバイスを受けることにより、課題の解決方法を生み出し、結果として技能・体力を高める。

また、「丈夫な体を持つ」「運動欲求を満たす」「知的欲求を満たす」「基礎・基本を確実に身に付ける」「仲間・教師と好ましい関係を築く」という“躍動する”児童を育成する。

(2) 研究主題設定理由

本校児童の体力については、新体力テストから考察するとこの数年間、低下傾向及び低い状態が続いている。平成23年度においては、男子は48項目中5項目、女子は4項目しか県平均値を上回っていない。また、児童の体力ランクについても男子はAが5.8%、Bが23.8%、女子はAが7.3%、Bが24.1%と、県が掲げるA、Bランク合わせて50%という目標に遠く及ばない。

また、「運動の二極化」が見られるだけではなく、特定の運動だけ行う「局化現象」も顕著である。ボール運動の技能は高いが、マット運動で正確に前転や後転ができないという児童も見られる。

児童のけがについても大変多い。年間の保健室の来室児童数は疾病も合わせるとのべ4000人を超える。けがの状況についても、「転んで手が出なかった」「ボールがとんで手で防げなかった」などの運動神経系の未発達によるけがが少なくない。

また、遅い就寝・起床時刻やメディアに長い時間接触する生活等、生活習慣が乱れている児童や、ストレス・不安を抱えている児童もいる。生涯を通じて自らの健康を適切に管理し改善していく資質や能力の基礎を培うために、健康の大切さを認識し、健康なライフスタイルを確立するための学習が必要である。

以上の実態を踏まえ、児童相互の関わり合いの中で、児童の技能・体力を確実に高めていくこと、保健的实践力を身に付けさせていくことが急務であり、「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」という研究主題を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容

「仲間と支え合う」とは…

- ①運動を楽しむことができ、運動への意欲が高まる。
- ②仲間と見合い、励まし合い、教え合い、認め合うという支え合いの中で、社会性を育む。
- ③一人では決してできない、自分の動きを仲間に見てもらい、アドバイスを受けることにより、課題の解決方法を生み出し、結果として技能・体力を高めることができる。

学校教育目標

- ・思いやりのある子
- ・よく考える子
- ・たくましい子

「躍動する」とは…

- ①丈夫な体を持つ。
- ②運動欲求を満たす。
- ③知的欲求を満たす。
- ④児童の基礎・基本の習得を保証する。
- ⑤仲間・教師との好ましい関係を築く。

研究主題

「仲間と支え合い、躍動する仙波っ子の育成」
～器械運動系を中心とした体育科指導法の研究～

目指す児童像

- (低) 誰とでも仲良く運動する子
(中) 友達と協力し、励まし合う子
(高) 友達と認め合い、喜びを共有できる子
- めあてを持って運動し、基礎的な動きを身に付ける子
自分の力に合った運動を行い、基本的な技能を身に付ける子
友達の良いところを見て学び、自ら技能を高められる子

仮説1

○系統的指導 ○技能面
発達段階に応じた動き・技能を系統的に身に付けさせ、できる喜びを十分に味わわせることができれば、児童が生き生きと運動に取り組み、技能や体力は高まるであろう。

仮説2

○運動生活化○健康安全面
体力や健康、安全について、目的意識をもって生活させることができれば、児童は心身ともに健康な生活を送ることができるであろう。

仮説3

○仲間との支え合いの面
仲間と声をかけ合い、教え合って運動に取り組みさせることができれば、児童は心から運動を楽しむことができるであろう。

手立て

- ①学校全体で共有するスモールステップ及びつまづきに応じた練習を明示した技の練習カードの作成
- ②技の系統表の作成及びそれに基づいた指導
- ③効果的な練習となる学習用具の作成
- ④運動の特性を味わわせるような学習過程の工夫
- ⑤診断的授業評価による重点指導項目の決定
- ⑥器械運動に関わる技能・体力調査による実態把握・年間を通じた重点的指導
- ⑦教師の器械運動理論・実技研修会の開催
- ⑧年間指導計画の改善

手立て

- ①休み時間の遊具の各技へのチャレンジ
- ②運動委員会による休み時間の運動教室
- ③体力向上通信「ばわーあぶ」の発行
- ④体力貯金カードの実施
- ⑤学期に1回、1週間生活習慣調査の実施
- ⑥児童の健康の意識化に向けた取組
- ⑦保健学習用具の開発
- ⑧養護教諭とのTTによる保健学習・保健指導

手立て

- ①学習規律の確立「体育の約束」の配布
- ②異質グループによるリーダーを中心とした教え合い(主に低・中学年)
- ③習熟・課題別グループによる課題を共有した児童同士の教え合い(主に高学年)
- ④友達の運動を見るポイントが明確になる学習用具の作成
- ⑤技のポイントが分かる動画・掲示資料の作成

(1) 授業実践例

【6年1組 伊藤直仁教諭 「まっすぐ、大きく、ひねって回転～側方倒立回転とひねりを加えて～」(マット運動)】

	1	2	3	4	5	6	7
0	集合・整列・挨拶・健康観察・準備運動						
	慣れの運動【側方倒立回転のアナログン(膝立運動)】 膝まで倒立移動、整列足交互、段差側方倒立回転(前転→横転前転、後転→側転後転)						
対エピソード	準備の方法を知る。 ・学習の流れを知る。 ・基礎技を知る。		ねらい① 側方倒立回転からひねって後ろや前を向こう				
共通課題学習	側方倒立回転の基本的な動きを身に付けよう		ねらい② 自分のできる技を繰り返したり組み合わせたりして楽しもう				
	振り上げはと踏み切り足 の振り上げ ・手原の横方向 ・腕に力、腰・足を乗せる		発表会				
			・スムーズに組み合わせる。 ・2枚の連続マットで2回回り進んで行う。 ・5つの回転はまくり進んだり組み合わせて行う。 ・はじめの1回のみひねりをつけて進ませる。 ・演習計画書を作成して、それを持って友だちの演技を観察する。				
45	学習のまとめ、次時の予告・交代分け・整理運動・健康観察・挨拶						

側方倒立回転のアナログン



側方倒立回転からロンダート、前ひねりの習得



課題・習熟別グループによる教え合い



見るポイントが明確に
異なる学習用具→モニター

課題・習熟別グループによる教え合い



練習をしているポイントに基づいて
説明できるように～動画制作～

5つの技を組み合わせるための練習



(2) その他の主な実践

① 技の提示資料及びDVD作成

体育館壁に提示
学習カードに活用



各技のポイントが分かるような動画や動きの連続図の提示資料を作成した。技の始まりから終わりまでの動きかたが一目で分かるために頭の中でイメージが持ちやすく、技術ポイントの理解へとつながった。

② 体育科授業「仙波プラン」



全職員が等質の体育科授業ができるように、授業の流れ、活動の意味を明記した授業のモデルプランを作成して、共通理解のもと授業を行うようにした。

③ 仙波チャレンジ



毎月学年ごとに決められた運動にチャレンジ!

1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30
31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42
43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54
55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66
67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78
79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90
91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102

成功したらシールをもらえるよ



家でも練習できるように体力向上運動で「かえる倒立」のコツを紹介。

器械運動に関わるかえる倒立やブリッジ等のチャレンジや、本校の課題でもある投力を高めるチャレンジを行った。多くの児童が毎月のチャレンジを楽しみにしているとともに、運動機会の増加にもつながった。

④ 「楽しい運動教室キャンペーン」



鉄棒の下には、安全のため毎朝、運動委員の児童がマットを敷いている。

休み時間に運動委員会の児童が鉄棒の技や登り棒の登り方などを教えた。特に鉄棒には多くの児童が集まるようになり、1年間を通して鉄棒は人気の運動種目になった。

⑤ 保健学習用具の開発・活用



手洗いチェッカー

手の洗い方～立体模型～

喫煙人形

保健学習で使える効果的な用具を作成し、授業で活用した。視覚に訴えられる教材で、児童も健康の大切さについてよく意識することができた。

⑥児童の健康の意識化に向けた取組



給食時計
～もぐもぐタイム
の設定～

一言保健指導
～全学級に掲示～



食育講演会
～朝ごはんの大切さ～

児童が自分の健康を意識できるように黙って食べる「もぐもぐタイム」の設定、全学級での朝の会や保健指導で役立てる「一言保健指導」、女子栄養大学の古川知子先生をお招きして朝ごはんの大切さを話していただいた食育講演会などを行った。

⑦診断的・総括的授業評価の活用



心的な面では20項目による診断的・総括的授業評価を行い、「たのしみ」「できる」「まなぶ」「まもる」という観点からその変容を考察した。年度当初の診断で課題を見いだし、重点を定めて指導の工夫を行うことにより、大きく伸ばすことができた。

⑧器械運動に関する技能調査



器械運動に関わる逆さ感覚、腕支持感覚、柔軟性についての年間を通した重点種目を定め、達成率の変容を追いつつ継続的に行っていた。授業の充実や運動の生活化と相まって、大きな成果が現れた。

4 研究の成果と課題

【成果】

- ・非日常的運動である器械運動に重点的に取り組んだことにより、普段使われない感覚や神経、筋肉が高まり、「走る」「跳ぶ」などの日常的な動作での高まりが見られた。
- ・全校で統一した技の練習カードや技のポイントを明確にした資料等を作成したり、学習効果を生み出すような教具を開発したりして活用することによって、児童が思考力・判断力、表現力等を発揮した運動を行い、自ら技能を高めようという勢いのある授業が展開されるようになった。
- ・体育科授業の充実、運動の生活化を図った休み時間の取組や家庭での運動の推奨により、休み時間や放課後に遊具や校庭で運動に親しんでいる姿が格段に増えた。
- ・体力向上に併せて健康意識を高めるような保健的活動を行ったことにより、多くの児童が自分の体に対して関心を持ち、進んで運動に親しんだり健康に良い生活を送ったりするようになった。

【課題】

- ・身に付けるべきことは必ず身に付けるという考え方からも、低学年の器械・器具を使った運動で基礎感覚・基本的な動きづくりで終わらず、器械運動につながるような動きを習得させる必要がある。
- ・学習が深まるにつれて児童の運動欲求の基準が高くなる傾向があり、技能が高まっても自信にまではつながらなかった。満足感・成就感を十分に感じさせる工夫が必要である。

研究主題

「豊かなかかわり合いを通して、自分から進んで活動できる児童の育成」
～学級活動を基盤とした、学習づくり生活づくりを通して～

川越市立新宿小学校

研究のポイント

- 学級活動(1)(2)の授業を核として友達とかかわりながら協力して活動できる児童の育成を目指した。
- 研究テーマにせまる課題を考え学年・学級に応じた方策を立て実践した。
- 学級活動(1)(2)で培った力を委員会活動、クラブ活動、異年齢集団活動、学校行事等で生かしていけるように努めた。
- 共通の補助簿や振り返り表を学校全体で活用することにより、同じ評価の観点と評価規準で児童の成長を見とれるように努めた。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学級活動を基盤とした学習づくり生活づくりをめざしていく。

「自分から自分たちで」考え、学習や生活を豊かにしていこうと実践していける児童を育成する。

(2) 研究主題設定の理由

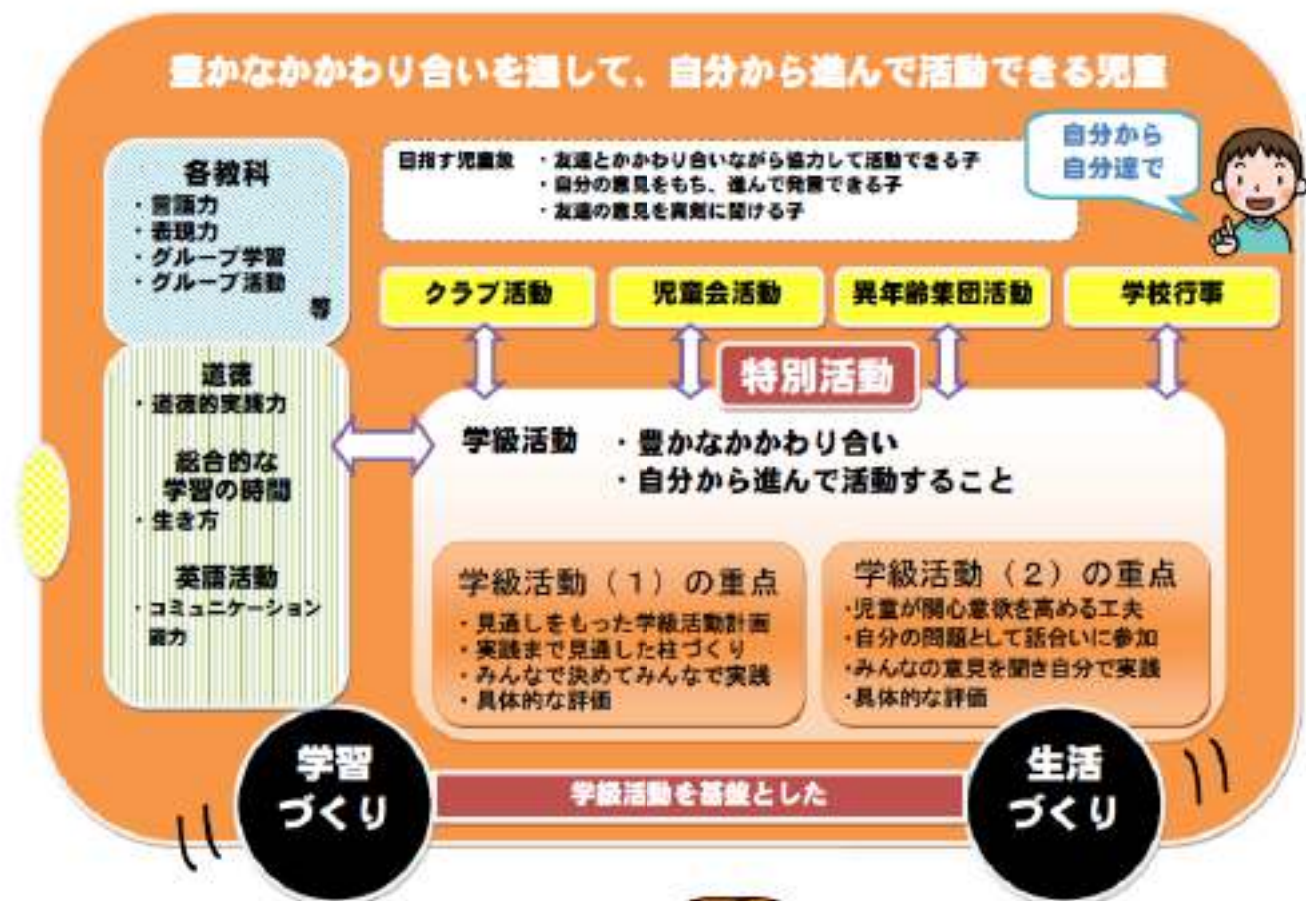
本校の児童は、「明るく素直で元気がよい」「学習に前向きに取り組む」というよさがある。反面、「決められたことはしっかり行うが、自発的には動けない」「人とかかわる経験が不足している」という課題がある。

そこで、学級活動を基盤とした学習づくり生活づくりを行い、「自分から自分たちで」進んで活動できる力を育て、学級活動で培った力を委員会活動・クラブ活動・異年齢集団活動はもとよりその他の活動場面でも生かしていけるようにしたいと考え本主題を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容



3 実践事例

(1) 学級活動（１）



(2) 学級活動 (2)

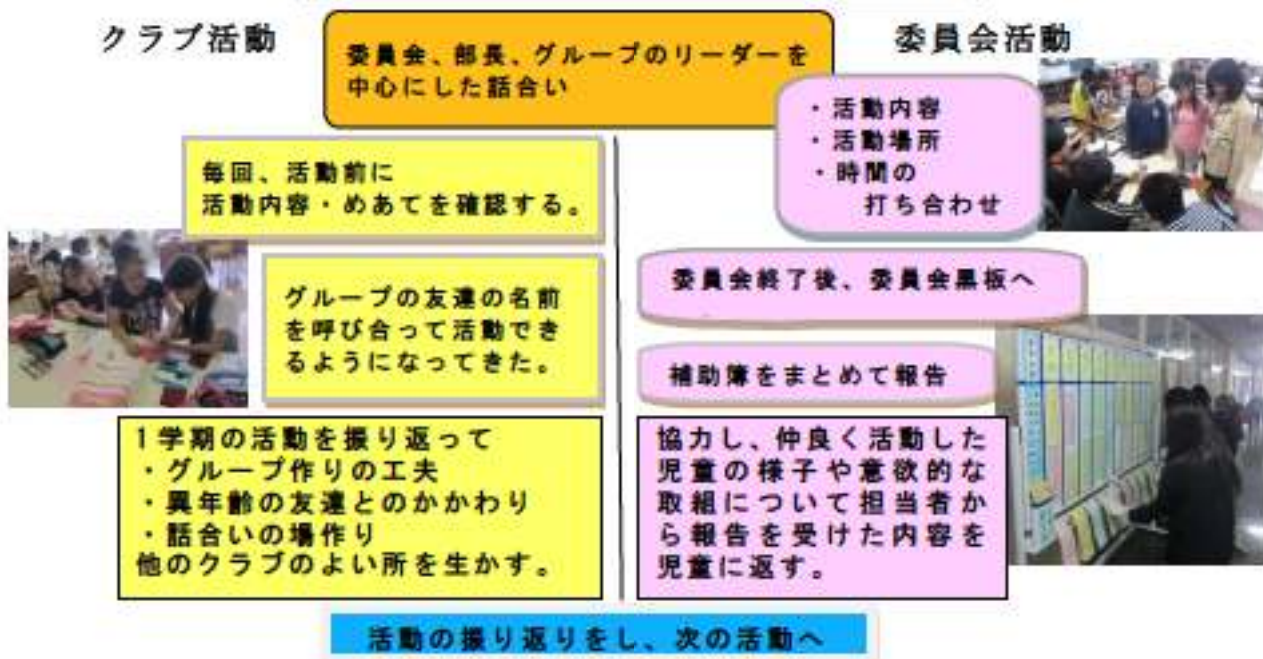
本校の指導案については、意識化→原因追求→自己決定→実践化の指導過程を国立教育政策研究所のリーフレットを参考にして表記しました。

【第3学年「室内のすごし方」の実践】



(3) 委員会活動・クラブ活動

人とのかかわりを大切にしたグループ作り



(4) 異年齢集団活動（なかよしクロス）

【児童の実態】【ねらい】【実践】

【よさを見とる評価】



4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

①教師

- ・児童とともに学級のことを真剣に見つめ、計画的に学級活動を行うことができた。
- ・授業や活動に向けて、学年を越えて情報交換を行い、児童のよさを見とることができるようになったので、誉め、励ますことが多くなった。
- ・学級活動（1）（2）、委員会活動、クラブ活動、異年齢の活動の中で児童がどのように多くの人とかかわって活動したかが見えるようになり、学級経営に生かすことができるようになった。

②児童

- ・学級活動コーナーや学級会のグッズを有効に活用し、自分たちで話し合いを進め、自分たちで解決をしていきたいと前向きに取り組む児童が増えた。
- ・話し合い活動で培われた経験を、委員会活動やクラブ活動、異年齢集団活動に生かし、リーダーシップを発揮した。
- ・一緒に活動する友達の名前を覚え、温かい言葉をかけ合うことができた。

(2) 今後の課題

- ・「伝え、比べ合う」力をつけていくためにも、「聞くこと」「話すこと」を各教科、領域で大切にし、相手を理解しようとする態度を育てていきたい。
- ・望ましい活動が展開される議題の選定はどうあるべきか、児童の発意を大切にしながら適切な支援を行っていきたい。

研究主題

「すこやかな心と体を持ち、たくましく生きる泉っ子の育成」
～運動の楽しさを味わい、主体的に取り組む体育科指導の工夫～

川越市立泉小学校

研究のポイント

- 体育の授業研究を通して、教師の授業力及び児童の体力向上を図るとともに、授業規律、集団行動、仲間意識等の向上を目指す。
- 授業のみならず、児童の主体的な活動を促したり保護者への生活習慣改善の啓発等の意識向上を図ったりすることで、心身ともに健康な児童の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学校教育目標「かしこく ゆたかに たくましく」の具現化を図るため、児童の実態を踏まえ、体育科の授業実践等を通して指導法の工夫改善を図り、体力、規律や精神面の向上を目指す。

(2) 研究主題設定理由

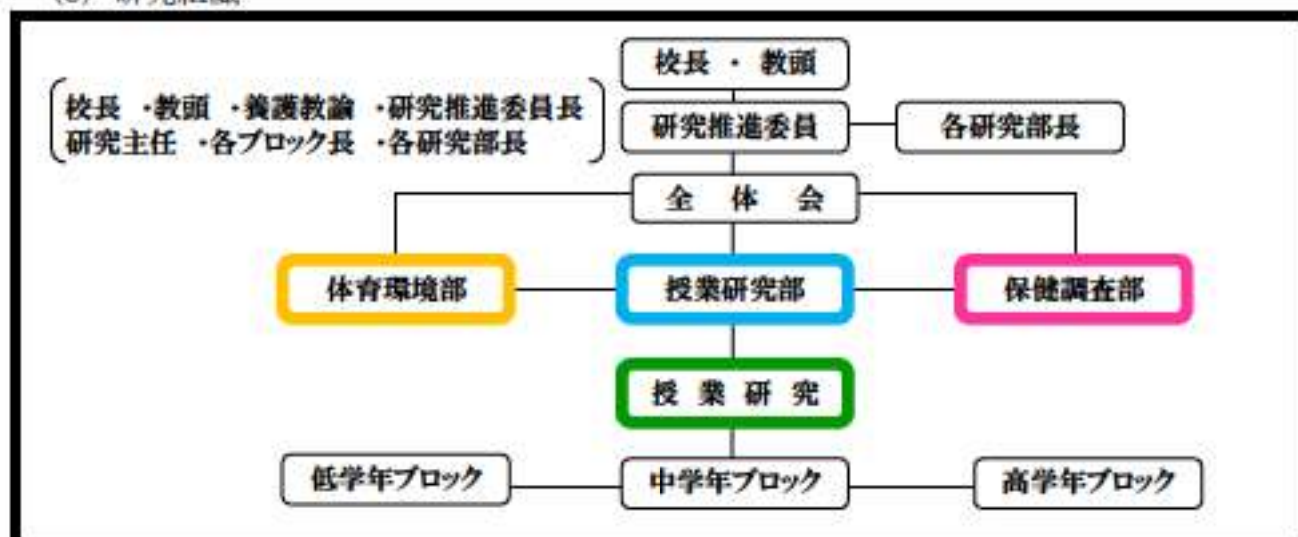
本校の児童は進んで朝マラソンや体育、外遊びをする。しかし、新体力テストでは、握力、シャトルラン等県平均を下回っている種目がある(下表)。これらは、普段同じ遊びをしているという経験不足の影響が考えられる。また、集中力、忍耐力の欠如、仲間意識の希薄など、規律面、精神面でも課題が見られる。そこで授業を通して技能の向上はもとより、規範意識の向上等課題解決を図ることや、生活の中で運動の日常化と多様化を図ることが効果的な体力向上につながると考え、本研究課題を設定した。

泉小		握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20mシャトルラン	50m走	立ち幅跳び	ボール投げ
男子	○	2	5	3	5	4	4	3	6
	▼	4	1	3	1	2	2	3	0
女子	○	1	4	4	4	4	5	3	3
	▼	5	2	2	2	2	1	3	3
全体	○	3	9	5	9	6	9	6	8
	▼	9	3	7	3	6	3	6	4

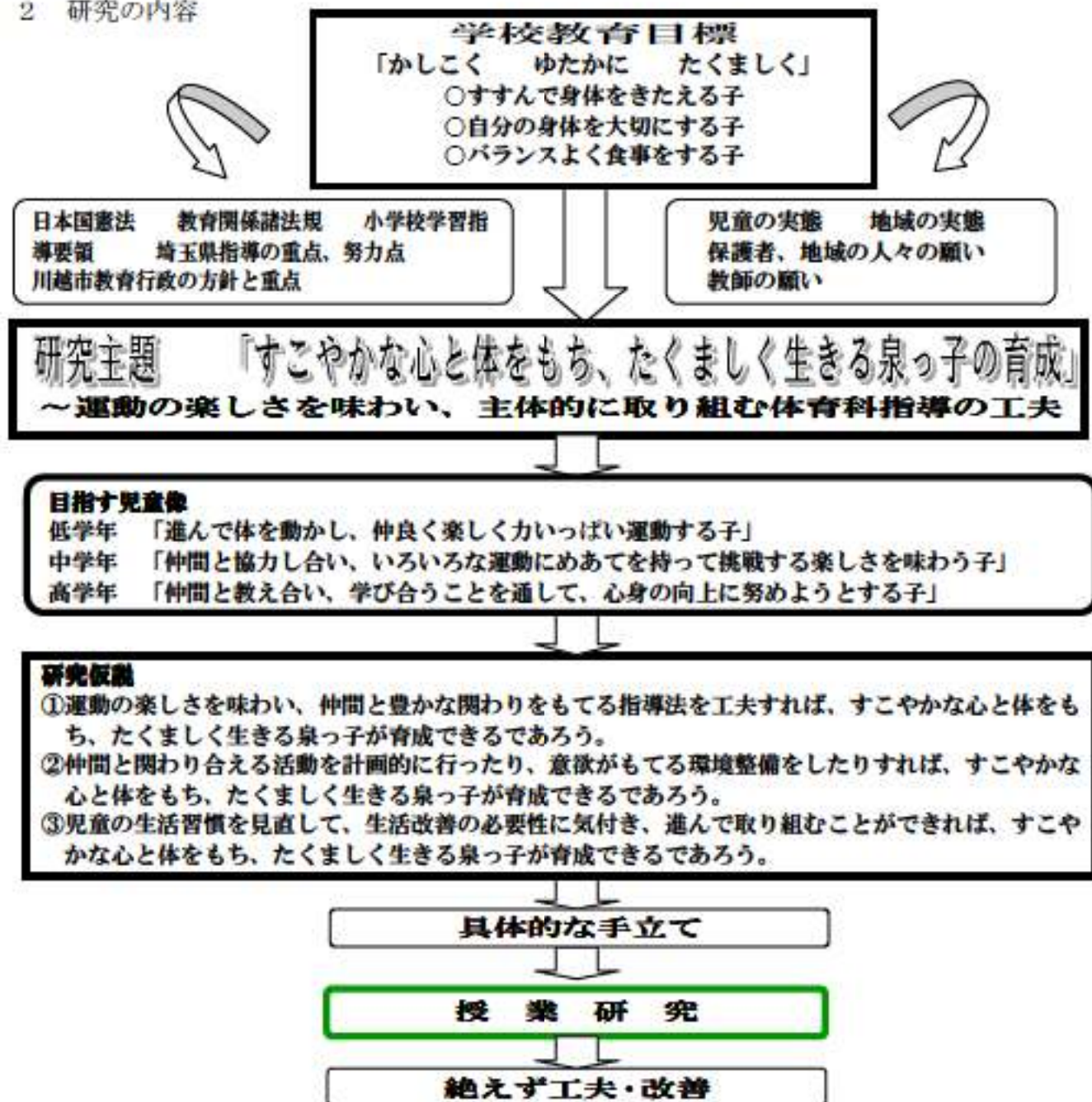
平成25年度の新体力テストと平成24年度県平均値との比較

○本校が県より高い数値の学年数 ▼本校が県より低い数値の学年数

(3) 研究組織



2 研究の内容



3 実践事例（第2学年）

単元名 跳び箱運動（器械運動）

単元の目標

- (1) 順番やきまりを守って、仲よく安全に体づくりの運動やリレーができるようにする。 【関心・意欲・態度】
- (2) 走る順番を工夫したり、障害物の置き方を考えてコースを作ったりできるようにする。（リレー）
楽しく運動できる行い方を選ぶことができるようにする。（体づくり運動） 【思考・判断】
- (3) 障害物の特徴に合わせて、調子よく走り越すことができるようにする。 【運動の技能】

学習過程（5時間扱い） 本時は○印 4/5時

時	1	2	3	④	5
10	集合・整列・挨拶・健康観察・準備運動 泉っ子サーキット（鉄棒・的当て・のぼり棒・馬跳び）				
20	オリエンテーション ・学習の進め方 ・めあての理解 ・学習カードの使い方 ・約束やルール ・用具の準備の仕方 ・グループと役割分担 ・いろいろなコースの試走	ねらい① いろいろなうんどうを みんなでいっしょにやってみよう！ 体づくり運動（体ほぐしの運動） リズムに乗って動く運動、リラックスしながらペアでストレッチングなど			
30		ねらい① ジャングルたんけんリレーでたのしもう！ 滝（ペットボトルハードル） 障害物1個のコースで2チーム対抗の折り返しリレーをして楽しむ。	ねらい② おたからをめざして、すばやくはしろう！ 滝（ペットボトルハードル） 池（輪1個） 草（段ボールハードル） 障害物を2個置いて2チーム対抗の折り返しリレーをする。	滝（ペットボトルハードル） 池（輪2個） 草（段ボールハードル） 岩（段ボール箱） 障害物を3個置いて2チーム対抗の折り返しリレーをする。	滝（ペットボトルハードル） 池（輪2個） 草（段ボールハードル） 岩（段ボール箱） 障害物を3個置いて、全てのチームと対戦するように2チーム対抗の折り返しリレーをする。 （学習のまとめ）
40		・リレーは2回ずつ2回戦行う。走る順番は変えてもよい。 ・人数調整のために2回走る児童は交代する。 ・障害物の置き方は、チームで工夫する。			
		学習のまとめ・次時の予告・後片付け・整理運動・挨拶			

展開

段階	学習内容・活動	指導上の留意点（○指導 ◆評価 △努力を要する児童への手だて）
導入 12分	1. 集合・整列・挨拶・健康観察 2. 準備運動（泉っ子体操） 3. 泉っ子サーキット ・登り棒 ・ボール投げ ・鉄棒 ・馬跳び	○素早く集合整列させ、元気な挨拶で気持ちよく学習を始める。 ○健康状態を観察し、服装を整えさせる。 ○体の各部位を意識して、運動させる。 ○泉っ子サーキットは、自分だけでなく友だちにけがをさせてしまう場合もあるので安全に十分注意して行わせる。 ○1つのコースに2分間ずつ取り組み、いろいろな運動を体験させる。馬跳びは2、3人組みで行い、運動量を増やす。 △苦手な児童には、取り組む内容のレベルを下げ取り組ませる。
	 	

ねらい① いろいろなうんどうをみんなでいっしょにやってみよう！

4. 体ほぐし運動

- ・1人で…石、紙、ボール、ねばねば歩き、ロボット歩き等
- ・2人で…背中の上でリラックス、背中合わせで立ち上がり、向かい合ってすわり引っ張り合い等

- 太鼓のリズムに合わせて自由に動き、体を動かす楽しさや心地よさを味わうようにさせる。
- 自分の体や友だちの体の状態を感じながら、ゆっくり、気持ちよく感じる強さで行わせる。



ねらい② おたからをめざして、すばやく はしろう！

展開
26
分

5. 本時のねらいを確認する。
6. 本時の場づくりを確認する。



7. ジャングル探検リレーをする。
- ・走る順番と回るコーンを確認める。
 - ・2チーム対抗戦で2試合を同時に行う。
 - ・2回戦行う。
 - ・相手チームを変えて、同様に対戦する。

- ジャングル探検リレーの方法が複雑なので、回り方やタッチの仕方を掲示物を活用しながら全員に周知させる。
- 対戦チームとコートを確認させる。
- 協力して安全にすばやく準備させる。
- 準備が終わったチームはスタートラインの位置で待つよう指示を出す。
- △安全に気を付けて素早く準備を進めるよう声かけをする。

- 自分の順番と回るコーンを確認させる。
- 正しいコースを走っているか、対戦チームで互いに見合うようにさせる。
- 大きな声で応援できるように支援する。
- 1回戦目をやってみて、障害物を置く位置や走る順番などを相談させる。
- 負けの続くチームには、障害物の越え方やコーンの回り方などアドバイスをする。
- ◆走る順番を工夫したり、障害物の置き方を考えてコースを作ったりしている。

【思考・判断】



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 新体力テストの考察から各学年の課題領域を把握し、それを補うための慣れの運動や体力を高める運動を充実させることができた。
- 学習過程や一時間の授業の流れ、児童の役割分担を明確にすることにより、児童が主体的に行動でき、能率的な授業を展開することができた。
- 児童同士の声かけや技のポイントの言葉かけ例等を生かして、技能の向上を図ることができ、さらに思いやりの心も育った。

(2) 課題

- 継続的に児童の実態把握を行うとともに、指導計画を見直し、さらなる授業改善を図っていきたい。
- 技能向上につながる教材・教具の工夫等、環境整備をさらに進めていきたい。
- 心と体の健康の保持・増進のために、保護者・地域との連携を深め活動していきたい。

研究主題

子どもたちの自信を育む国語科教育

～「読むこと」を通して、考えを深め合い自分の思いを豊かに表現できる児童の育成～

川越市立霞ヶ関北小学校

研究のポイント

- 文学的な文章から豊かに想像したり読み取ったりした「自分の考え」をもち、友達との話し合いを通して「自分の考え」を深める国語科の学習によって、児童のコミュニケーション能力を育む。
- 「一人読み」「話し合い」の系統性を明らかにし、発達段階に応じた指導の工夫・改善に努める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

国語科における「読むこと」の指導を通して、自分の考えに自信をもち、友達に伝えられる児童を育成する。

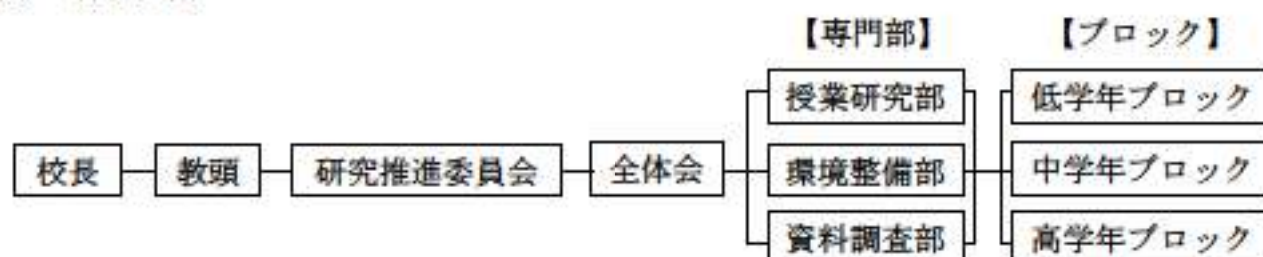
(2) 研究主題設定理由

本校では、学校教育目標「かしこく（あふれる知性）・きよく（豊かな感性）・たくましく（生きる意欲）」を掲げ、「自分のよさ（知性・感性）を発揮し、心豊かにたくましく生きる子ども」の育成を目指している。特に「自分のよさを発揮する」という視点から、児童一人一人が自分のよさに気づき、自信をもって物事に取り組み、よりよい学校生活を送ることができることを重点に教育活動を展開している。

しかしながら、本校の児童の実態を見ると、人間関係に不安を感じ、望ましい人間関係を築くことに意欲を欠く児童がいることがわかる。

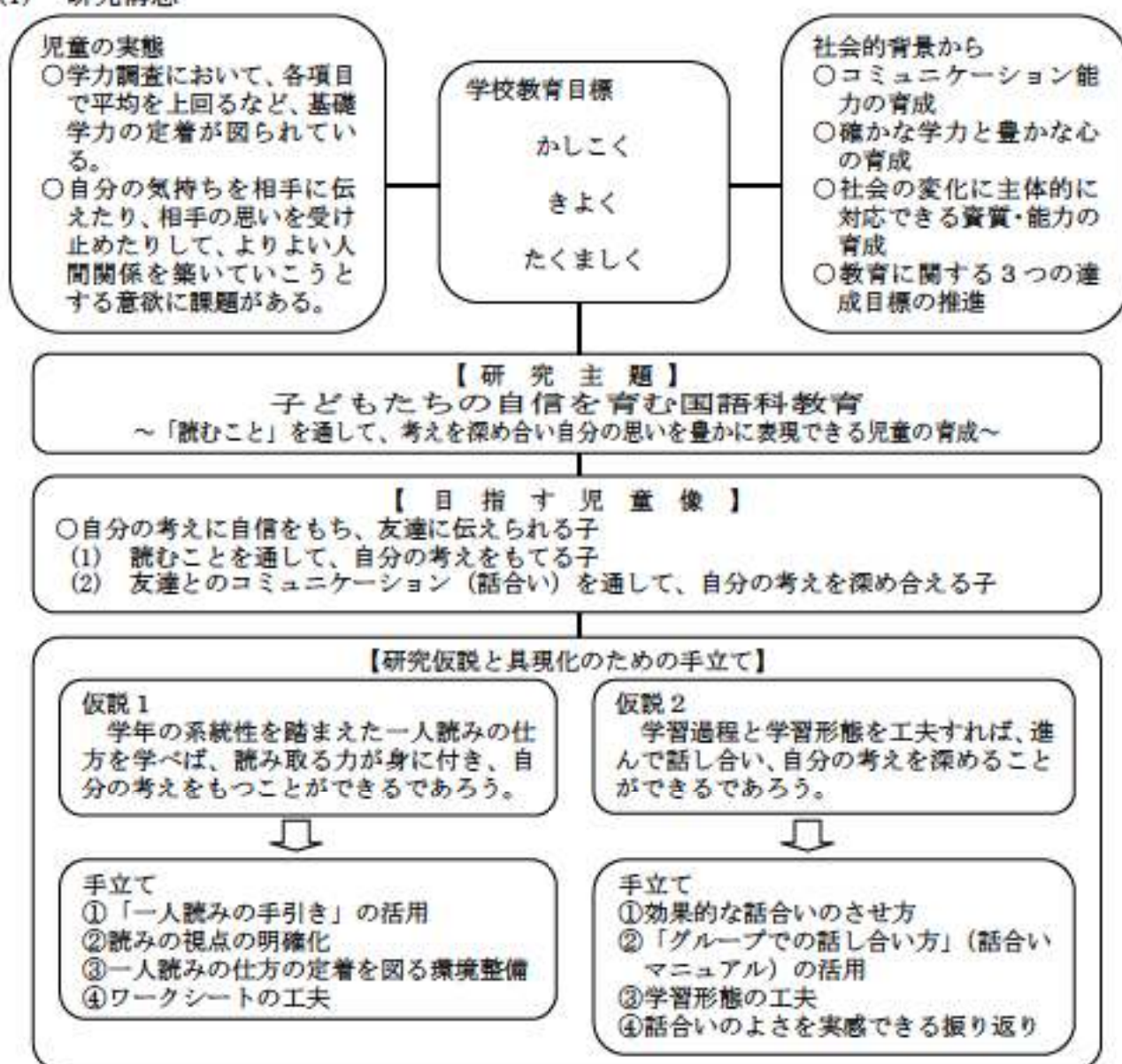
そこで、課題を解決するため、国語科の「読むこと」の指導を通して、相手の心情を察したり、自分の考えを積極的に述べたりするコミュニケーション能力の育成に取り組むことにした。「子どもたちの自信を育む国語科教育」を研究テーマに掲げ、「読むこと」における「一人読み」と「話し合い」の能力を児童一人一人に身に付けさせる授業の工夫・改善に努めていく。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想



(2) 専門部の取組

① 授業研究部

- ・子どもたちの自信をより確かに育むことができる授業の工夫・改善に努める。
- ・指導内容の系統性を踏まえながら、全職員の共通理解を図り、一貫性のある指導が行われるようにする。

ア 授業研究会の実施

イ 『一人読み系統表』の作成

ウ 『「読むこと」における話し合いの系統表』の作成

エ ホワイトボードの活用

オ 学習過程の基本形の確立

カ 児童用資料の作成



② 環境整備部

- ・言語活動充実のための掲示物を作成し、児童の言語に対する興味関心を高める。

- ア 国語コーナーの設置
- イ 発表の仕方の掲示



③ 調査資料部

- ・国語科における児童の意識や言語活動に関する実態を調査・考察することにより、指導方法の工夫・改善に生かす。

- ア アンケートの作成・実施
- イ 結果の考察・教師や児童へのフィードバック



3 実践事例

(1) 実践1 (第1学年「たぬきの糸車」)

手立て①—既習の「くじらぐも」の学習で、登場人物の気持ちや周りの情景を想像して読んだ活動を想起できるように、国語コーナーに掲示物で提示しておく。

手立て②—グループでの話し合いでは、友達の見解に対して、同じところやよいところに着目し、シールを貼って整理する。よい意見「きらきらいけん」を探して発表し合うことで、話し合いを活性化し、自信をもたせる。

(2) 実践2 (第2学年「スーホの白い馬」)

手立て①—ワークシートは、一人読みによる自分の考え、友達のよい意見、話し合い後の課題に対するまとめという学習過程がわかり、話し合いを通して自分の読みの変容や深まりに気付かせていくようにする。

手立て②—ホワイトボードに本文を提示し、叙述に基づいた話し合いができるようにする。吹き出しカードをホワイトボードに掲示することにより、意見を比較しやすくし、話し合いの焦点化を図る。

(3) 実践3 (第3学年「モチモチの木」)

手立て①—「一人読み学習の進め方」を参考にしながら、第二次の第1場面は、読み取りとともに学習の進め方についても一斉指導を行う。

手立て②—「グループでの話し合い方(話し合いのマニュアル)」をホワイトボードの近くに置くことで、司会や発表に不慣れな児童がすぐに活用できるようにする。

(4) 実践4 (第4学年「ごんぎつね」)

手立て①—ワークシートには場面ごとに本文を載せて、一人読みでサイドラインを引いたり書き込みをしたりできるようにし、叙述に即した読み取りができるようにする。

手立て②—話し合いが収束できるような課題を設定する。司会を中心にそれぞれの考

えの共通点・相違点を確認しながら考えを伝え合い、分類・整理・統合してまとめられるようにする。

(5) 実践5 (第5学年「わらぐつの中の神様」)

手立て①—これまでの授業の課題とまとめを国語コーナーに掲示しておき、いつでも学習を振り返ることができるようにしておく。

手立て②—全体の話合いでは、グループの意図的指名により、押さえるべき叙述と読み取った心情を発表させる。グループでの読みがさらに深まるよう、焦点化した話合いをする。

(6) 実践6 (第6学年「海の命」)

手立て①—単元の最初の時間に「一人読みの手引き」を活用して、着目する表現や書き込みの仕方について確認する。

手立て②—一人読みにより自分の考えをもち、グループ・全体での話合いを通して読みが深まったことについて自己評価させる。自己評価を行うことで、次の学習への意欲につなげていく。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

ア 一人読み、グループでの話合い、全体での話合い、自己評価の学習過程の定着が図られ、児童の主体的に学ぶ態度が身に付いた。

イ 「一人読み系統表」に基づいた読みの指導、「一人読みの手引き」の作成や既習事項を提示した環境整備などを通して、「読むこと」に自信をもって取り組むことができるようになった。

ウ グループでの話合いにおいて、一人一人が発表する場を設定したことにより、自分の考えを明確にもち、自信をもって伝えることができるようになった。また、友達の意見を共感的に聞き、読みを柔軟に深めていこうとする態度が養われた。

エ 友達と意見を交流する楽しさや価値に気づき、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度が育ってきた。

オ 「国語のびのびタイム」の短作文づくりや辞書の活用、校舎内の国語コーナーの設置などにより、言葉への関心を高めるとともに、語彙力や表現力の向上が図られた。

(2) 課題

ア 身に付けた一人読みの仕方、話合いで深めた読み方を次の学習に生かせるような指導・支援をさらに工夫していきたい。

イ 国語科の「読むこと」で身に付けたコミュニケーション能力を、各教科等をはじめ様々な実践場面で活用できるように指導・支援に努め、よりよいコミュニケーションの力をさらに高めていきたい。

ウ 本校の特色であるオープンスペースを有効に活用した話合いの形態や場の工夫など、さらに効果的な方法を追究したい。

「互いに認め合い よりよい人間関係を築く児童の育成」 ～思いや考えを伝え合う話し合い活動を通して～

川越市立川越西小学校

研究のポイント

- 意欲的な話し合い活動をするために、計画委員会等の事前指導を充実させるなど、話し合い活動の環境を整える。
- お互いを認め合う話し合い活動をするために、学年に応じた話し合いの約束や進め方など、意見が言いやすくなる工夫をする。
- 人間関係を深め、集団活動に主体的に関わるために、事後の活動や支援を明確にして適切な評価をする。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 話し合い活動の環境を整えることにより、学級会の仕方が分かり意欲的に話し合いに参加する子を育成する。
- ② 意見が言いやすくなる工夫をすることにより、お互いのよさを認め合いよりよい考えがもてる子を育成する。
- ③ 事後の支援を明確にして、適切な評価をすることにより、話し合ったことを自主的に実践できる子を育成する。

(2) 研究主題設定理由

本校では、平成21・22年度に国語科で「確かな言語能力を育む国語科指導～読むことの学習を通して～」(川越市教育委員会・入間地区国語教育研究会委嘱)、平成23年度に特別活動「言語活動の充実をめざして～学習規律の確立と話し合い活動を通して～」を研究主題に学校研究に取り組んできた。

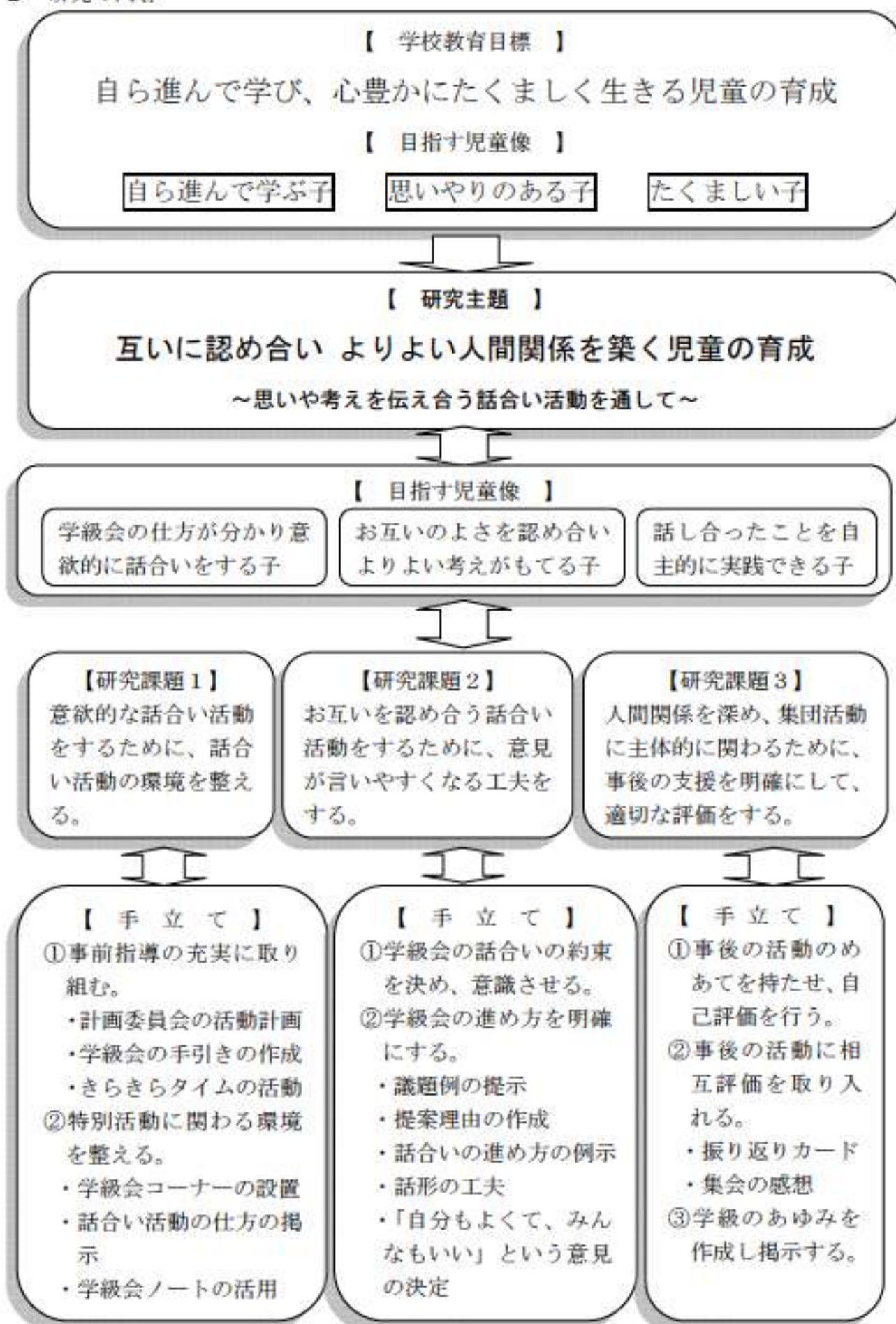
この3年間の研究を通して、「自分の考えを進んで表現すること」や「発表の仕方など、自分の考えを相手にしっかりと伝えること」などに課題があることが明らかになった。また、本校児童の実態としては、「友達と上手く関われない」「自分の気持ちや思いを相手に上手く伝えられず些細なことでトラブルになる」など、相手の気持ちを思いやる言動に課題がある。

以上のことから、特別活動の話し合い活動を通して、よりよい人間関係の醸成を目指し、研究主題を「互いに認め合い よりよい人間関係を築く児童の育成」、副題を「思いや考えを伝え合う話し合い活動を通して」と設定し、研究を進めることにした。

(3) 研究組織



2 研究の内容



3 実践事例

(1) 研究課題1の「手立て」の実際

- ① 事前指導が充実するように、計画委員会の活動計画表や学級会の手引きを作成したり、業前の時間に月1回係活動の計画や見直し時間を「きらきらタイム」として設けたりした。

計画委員活動表

計画委員と学級の児童の活動を分かりやすく表にまとめ掲示する。



提案理由と短冊

提案理由や短冊は事前に書き、準備しておく。短冊は内容によって色分けをし、背面黒板に掲示しておく。



計画委員会

計画委員が中心となり学級会の準備を行う。

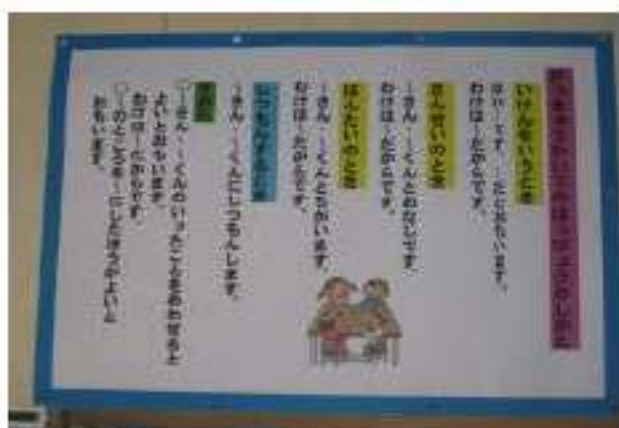


- ② 学級会コーナーの設置、話し合い活動の仕方の掲示、学級会ノートを活用など、特別活動に関わる環境を整えた。

(2) 研究課題2の「手立て」の実際

- ① 学級会の話し合いの約束を決め、意識させた。

学校で統一した話し合いの約束（低学年用・3年生～6年生用）の作成及び掲示



- ② 学級会の進め方を明確にした。

- 議題への気付きを育てるために、議題例を掲示した。また、集会的な議題ばかりでなく、学級の諸問題にも目を向けさせるために、教師による声かけや提案カードの色分けなどを行った。
- 提案理由の作成について共通理解を図った。「Ⅰ提案した背景や現状」「Ⅱ学級での課題」「Ⅲ話し合いをすること」で目指す学級像を入れる。
- 話し合いの進め方を例示したり、話し合いの形を掲示物を作成したりした。

(3) 課題研究3の「手立て」の実際

- ① 事後の活動のめあてを持たせ、自己評価を行った。

学級会ノートに設けた
事後の活動のめあての記入



集会後の
感想発表



あのね帳による振り返り



- ② 事後の活動に相互評価を取り入れた。
③ 事後の活動を記録に残し、学級のあゆみとして掲示した。



学級のあゆみ (低学年)



学級のあゆみ (中学年)



学級のあゆみ (高学年)

4 研究の成果と課題

【 成 果 】

- 話し合い活動の環境を整えたことにより、学級会の進め方が分かり、見通しをもって意欲的に話し合い活動ができた。
- 話し合いの約束を守り、学級会で自由に意見を述べ合うことが、お互いを認め合うことになり、活発な意見交換ができるようになった。
- 話し合ったことを、実践するのを楽しみに、話し合うことができるようになってきた。事後の活動を積み重ねて人間関係を深めることができた。

【 課 題 】

- 自分の考えをもつことはできるが、自信をもって発表することができない児童がいるので、個別に支援する必要がある。
- 話し合いのまとめ方についてさらに研修を深め、共通理解をして実践していく必要がある。
- 事前の準備時間の有効活用や事後の計画的な活動のために、年間計画を見通した取組を充実させることが必要である。

研究主題

「自ら学び・考え・実践する体力向上」の推進を目指して ～自己課題を設定し、自ら課題解決することができる生徒の育成～

川越市立山田中学校

研究のポイント

- 保健体育の授業の中に本校生徒の体力課題解決のための活動を補強運動として組み込み実践する。
- 自己の課題を知り、課題解決をするための学習資料や活動場面を工夫した授業を展開する。
- 委員会を活用し、日常生活の見直しを図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の学校目標は、「思いやりのある生徒」「自ら学ぶ生徒」「心身を鍛える生徒」の三つが掲げられている。その中でも保健体育と関係の深い「心身を鍛える生徒」を核として、体力向上を目指す授業の実践を目的とした。

(2) 研究主題設定の理由

ここ数年低下傾向にあり、本校の課題となっている「持久走」への取組を中心に、生徒の主体的な判断・行動の育成を目指し、本校生徒の全体的な体力の向上を図っていくこととした。25年度の新体力テストの結果をみると、「柔軟性」が新たな課題であることがわかり、「柔軟性」についても取り組むこととし、併せて埼玉県平成24年度の体力課題である「ボール投げ」の体力課題にも取り組むことにした。

(3) 研究の仮説

- ① 自らの課題を選択し、解決のための活動場面を設定することが、生徒の体力向上への課題解決につながるのではないかと。
- ② 委員会を活用し、食への関心を高め課題解決を図ることが、基本的な生活習慣の確立の一助となり、体力の向上につながるのではないかと。

2 研究の内容

(1) 研究組織

体力向上推進委員会を中心に、3つの部会を設け、本校の体力向上に取り組んだ。



(2) 部会の目標

(授業研究部)

授業の中で体力課題を含んだ授業展開の実践

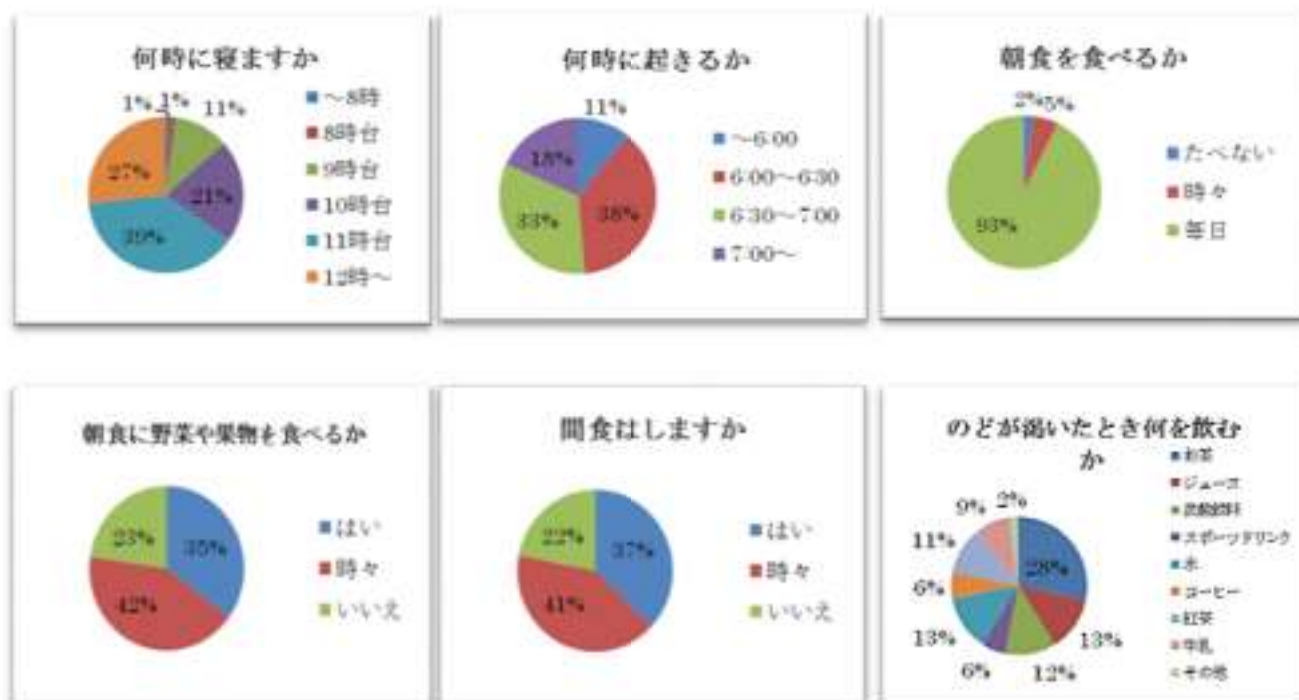
(健康食育部・調査研究部)

養護教諭、給食担当教諭を中心として、調査広報活動と給食の残食調査を行い、健康増進と体力の向上を目指す。

3 実線事例

(1) 調査研究部・健康食育部の実践

①生活実態調べ (平成25年2月調べ 292人)



これらの結果を踏まえ、栄養士の資格を有する家庭科の教師が、専門的な知識を生かし、生活実態調べを活用した授業を展開した。また、家

庭教育学級においても、「食育」について講義を行うなど、保護者との連携を図った。

② 給食残食調べ

給食委員会では、「健全な身体をつくるには食生活から」という視点で、毎日、“給食の残食調べ”を実施した。調べた結果は、翌日の給食時の放送で発表され、食事の大切さの指導になった。



③ 授業研究部会の実践

【柔軟性の向上を目指して】

ア 「動きのある柔軟運動」



【投げる力の向上を目指して】

イ 「どすこい」 バウンズボール投げ



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 本校の体力課題解決のための運動を保健体育の授業において、意図的に組み込み、生徒一人一人に課題を持たせた授業を展開することにより、自己の課題解決に向けて、生徒の積極的に取り組む姿勢が見られるようになった。
- ② 本校の課題であった「投力」の向上は、昨年度の取り組みにより、向上が見られた。今年度は、新たな課題である「柔軟性」の向上を目指し、授業において意図的に取り組んだことにより、柔軟性の重要性を意識する生徒が増えた。

(2) 課題

- ① 毎年、学年や男女別に体力課題（種目等）に変化がある。このため、重点取組種目を設定しつつ、全体的な体力の向上（土台づくり）を見据えて取り組んでいく必要がある。
- ② 給食指導や食育指導などの資料が生徒の生活の中により直接的に結びつくものになるように取り組む必要がある。

「生徒の自主的行動力を伸ばす」

～確かな学力の育成に向けて～

川越市立山田中学校

研究のポイント

- 本校の現状を検証し、教育活動実践の見直しや深化・充実を図ることにより、今後も長期的に現在の状況が継続されていくことを目指した。
- 教科指導、特別活動、体験活動の各研究部において研究を進めた。本校の教育環境を生かしているものを積極的に取り上げ、整理した。
- 落ち着いた学校生活が生徒の学力の伸長につながることを確認できた。

1 研究の概要

(1) 研究主題設定の理由

現在のような順調な教育活動が実践されているここ数年の本校の現状を検証し、さらに教育活動実践の見直しや深化・充実を図ることにより、今後も長期的に現在の状況が継続されていくことを目指し、本課題研究に取り組むこととした。

“確かな学力”の育成のためには、生徒が自ら学習活動に取り組む意欲の向上が大切である。また、学校評価、学校関係者評価等の結果から、主体的・自主的な判断力や行動力を身に付けることが今後の本校の生徒の課題の一つとして挙げられている。

本研究は、生徒の自主的な行動力や前向きな気持ちを伸ばすための手立てについて、これまでの教育実践を整理し、さらに今後の教育活動に生かそうとするものである。

(2) 研究主題に対する研究の方向性

- 様々な教育活動において、より生徒の主体的活動を促す取組を工夫する。
- 教師の課題設定で活動が展開されるばかりでなく、生徒自身が課題を見付け、取り組む展開を、生徒の発達段階に応じて取り入れる工夫をする。
- 生徒が自ら考え、主体的に行動するのに必要となる、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための指導方法の工夫・改善を行う。
- 生徒の主体的な学習活動を充実させるための指導方法の工夫・改善を図る。

(3) 各研究部における主な方策

① 教科指導研究部会

- ・ 課題解決的な活動過程を取り入れた授業展開や課題提示、小集団学習や発表活動を多く取り入れるなど指導方法の工夫・改善を図り、教材・教具の活用・開発などに取り組む。
- ・ 週末家庭学習について、各教科における課題の出題方法を工夫する。

② 特別活動研究部会

- ・ 生徒会本部役員を中心とした生徒会活動、生徒会専門委員会の活動等のまとめと今後の課題の明確化を行う。

③ 体験活動研究部会

- ・ 山田地区地域子どもサポート委員会や小学校と連携した取組の推進を行う。

- ・ 「総合的な学習の時間」の取組を中心とした探究活動の推進を行う。

2 研究の内容

(1) 学校全体としての取組

① 学習に関するルールの確認

毎年4月当初、全校集会の「学校ガイダンス」において、中学校生活の基本的なルールを確認しているが、学習に関するルールについては学習指導担当の教員が説明する。全校の生徒が同じ認識を持つことも大切である。また、当たり前なのが当たり前になるようになるためには指導が必要と考え、どの教員も同じ基準で指導できるということは、本校のような小規模校では大変重要である。

② 週末家庭学習の取組

学校生活に関するアンケート（学校評価）でも家庭学習への取組が課題である。そこで、週末に机に向かう習慣を付けさせるための取組を行っている。家庭学習の申込書を全生徒に配布し、申込みを募る。課題プリントは教科担当教員が用意し、週末に配布する。家庭で学習したプリントは各自で用意したファイルに綴じ、月曜日にクラスごとに用意したケースに提出する。担任がチェックし、生徒へ戻す。



③ 公民館学習会の実施

山田中PTAと山田地区子どもサポート委員会の主催で実施している自主学習会である。定期テスト前の土曜日（年5回）と夏季休業期間に山田公民館で行っている。学習サポーターとして、山田地区にある城西大学付属川越高校の生徒に協力を依頼している。事前に希望者を募るが、急な参加にも対応している。



④ 夏休みの補充学習

基本的な内容を確認する学習会で、7月の下旬に5教科で実施。申し込み書を生徒全体に配布、生徒は保護者と相談をした上で自分で判断し、参加を申し込む。参加の必要性があると思われる生徒には、担任などが個別に声かけをし参加を促した。

(2) 各教科の研究実践～教科研究部より～

各教科で仮説を設定し、生徒の自主的・主体的な行動を引き出す学習指導法の工夫・改善に取り組んだ。詳細は研究紀要にまとめてある。

(3) 生徒会組織を生かした研究実践～特別活動研究部より～

① 行事への積極的な参加を促す取組

- ア 応援プロジェクトの企画
- イ 行事ごとの実行委員会の立ち上げ
- ウ 生徒朝会の内容の工夫

② 委員会活動を通して、生徒の自治的能力や社会貢献への意欲を伸ばす取組

- ア 朝のあいさつ運動
- イ 学校内の環境整備
- ウ エコキャップ回収運動
- エ 特別養護老人ホーム「アイリス」訪問
- オ 給食の残食量調査

③ 学校生活向上をめざし、生徒の意識を高めるための取組

- ア 生徒朝会
- イ 毎月の生活目標

(4) 地域との連携による教育活動～体験活動研究部より～

① 生徒会活動の充実

- ア 生徒会が地域の様々な機関と連携した取組

◇地元企業のバイオニアと連携したエコキャップ回収運動

学区内にあるバイオニア株式会社川越事業所が環境貢献事業の一環としてペットボトルキャップの回収に取り組んでいることを知り、本校の生徒会もこの活動に協力している。「キャップ800個でポリオワクチン1人分を購入できる」というキャッチフレーズを掲げ、年間を通じて回収活動を行っている。学級単位で収集数を発表したりするが、それはあくまでも貢献活動の指標であり、生徒の活動が他者に役立っていることを実感させ、このような活動、将来的には社会貢献活動などにも自ら進んで取り組めるようにさせることが最終目的である。

◇特別養護老人施設「アイリス」でのふれあい活動と奉仕作業

生徒会専門委員会のひとつ、福祉委員会が主宰する活動で、学区内の特別養護老人施設「アイリス」を訪問し、奉仕活動や入所者との交流を行う。毎学期末に実施、本校恒例の行事としてすでに定着した。毎回参加者を募り、30名程度の生徒が訪問している。この活動を通じて、自ら進んで他者に役立つ行動がとれるようになることを期待している。



- イ 行事毎に実行委員会を立ち上げての取組

ウ 体育祭縦割り団での活動

体育祭の取組を色別対抗にし、競技の説明から練習まで、三つの学年を縦割りにした団毎に行っている。3年生が団長となり、生徒の士気を鼓舞しつつ、異年齢集団がまとまって動けるようなはたらきかけを工夫しながら行っている。毎日の練習計画、練習の実施など、生徒が主体的にかかわり、活動している。

② 総合的な学習の時間の充実

山田地区の特色である「米作り」について、その歴史や育て方まで地域の方々から学び、田植えや稲刈り等の実体験をする。調整役をするのが山田地区地域子どもサポート委員会であり、多くの地域の方々の支援を受けている。田植えの仕方から、かまどでの炊飯の方法まで、地域の方々から生徒は直接指導を受け、学んでいる。



③ 地域の行事への参加

ア 地区の体育祭への協力

山田地区の体育祭において、本校野球部が用具係として協力をしている。

イ 「かかしまつり」への参加

「かかしまつり」とは、毎年、北山田の田圃で行われる山田地区の秋のお祭りである。この祭りに本校生徒は、各クラス一体のかかしの出品と祭り当日の手伝い（会場整理や各ブースの運営等）という形で参加している。かかしの材料の準備と、生徒が祭りに参加する時の実行委員会との調整を山田地区地域子どもサポート委員会に要請している。今年で祭りに参加して10年目となる。

地域の行事に参加することで、生徒は地域の老若男女の方々と生の触れ合いをしている。大人があまり周到な準備をしてしまうのではなく、生徒たちが地域の方々と話し合いながら「かかしまつり」を成功させるような方針をとっている。

3 研究の成果と今後の課題

現在、生徒たちは中学校生活を生き生きと送っている。授業への取組も良好であり、落ち着いた中で考えたり実技や作業に取り組むことができている。このような落ち着いた雰囲気は、今回の研究でまとめた毎日の積み重ねによってつくられると考える。

学習規律や生活上のルールなどを、全校で統一することで、生徒たちが安心して授業や諸活動に取り組むことができる。家庭学習は同級生と同じ様に取り組むことによって、励みとなり、頑張る様子が伺える。地域との関わりや校外活動においては、地域の方々の愛情に支えられて様々な体験ができ、それがさらに生徒の豊かな心の育成につながっていると思われる。

今回の研究において、生徒の急激な変化を裏付ける特別な結果はなかったが、落ちついた雰囲気は諸検査や諸調査の結果など生徒の現況に着実に現れている。さらに、このようにすぐには現れてこない、いずれの日にか生徒の内面で伸びてくるような、地ならしをし、種をまくような指導、学ぶことに対する土台を作ることこそが、我々の日々の重要な取組と考える。

その中で、家庭学習の定着に向けた取組に関して、自分からはできない、継続が難しい生徒をどうするか、という点については今後も工夫改善をしていかなければならない課題の一つである。

川越市教育委員会・学力向上検討委員会から出された「授業と家庭学習のサイクルプラン」には、川越市の児童生徒の現状と課題とその解決のための方策が掲載されている。学校では授業の工夫・改善、つまずきへの補習、宿題の活用など、家庭では生活リズムづくり、学習の環境づくり、宿題への協力など、地域では授業へのサポート、家庭学習へのサポート、体験活動へのサポートなどが挙げられているが、現在の山田地区において、これらの取組はだいぶ軌道に乗ってきていると思われる。だが、常に課題意識をもち、生徒の「生きる力」の育成のためのよりよい取組につなげていきたい。生徒にとって唯一の学校である山田中が、胸を張って「自分の学校が一番」といえる、かけがえのない学校であり続けるために、我々は日々、研鑽を積むことが大切であることをあらためて確認できたこともまた、今回の研究の成果ではないかと思う。

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」 ～体験的な活動をとおり、思考力・表現力を伸ばす理科・生活科指導の工夫～

川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- 昨年度の研究の課題（「生命・地球」の内容の知識理解の定着が不十分）から自然と直触れ合えるような体験的な活動を通して、理科への興味関心を一層高めるような学習の展開を図っていく。
- 生活科の学習において、2年間を見通した指導が図られるように年間指導計画の見直しを行い、児童が自分の思いを十分に表現できるような学習を展開していく。
- 児童の実態を調査・分析し、的確に把握することにより、進んで自然に親しむ児童を育成していく。
- 理科・生活科の学習と実生活を結びつけるために、校内展示や理科コーナーを工夫・改善していく。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

昨今、小学校理科教育において、児童の理科離れや科学的な思考力の低下という問題が指摘されている。本校においては、理科に関する各種調査の結果から、各学年ともに理科の成績が他教科の成績を下回っているという現状がある。理科好きな児童が多い反面、基礎・基本の定着、科学的な思考力が十分に身につけているとは言えない。また、校区が市街地にあり、日常生活での自然に関する生活体験は全体的に乏しいという実態がある。

このような実態を踏まえて、児童が主体的に学べるような体験的な学習を行い、実感を伴った理解を促しながら科学的な思考力や表現力を育てるための指導法の工夫改善を図っていくことにした。

(2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標「四つのだいじ」（いのちをだいじに、人をだいじに、心をだいじに、ものをだいじに）の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「体験的な活動をとおり、思考力・表現力を伸ばす理科・生活科指導の工夫」とした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

- ① 五感を豊かに働かせる具体的な活動や体験を多く取り入れ、問題解決的な学習活動や自然の不思議さや面白さを実感する学習活動を展開すれば、新しい発見や出会いに感動し、自然の事象に主体的に働きかける児童が育成できるであろう。
- ② 児童の実態を把握し、一人ひとりが自然と関わる学習活動を展開すれば、自然に親しみ、自然を愛し、生命や環境を大切にしようとする心豊かな児童が育成できるであろう。
- ③ 理科の学習と、実生活とを結びつけた授業を展開し、表現活動や意見交換をする場を工夫すれば、自然に対する見方や科学的な思考力を深め、自然の性質や規則性を生活の中で実感し、表現しようとする児童が育成できるであろう。

3 実践事例

(1) 授業研究部

- ① 生物分野での理科授業研究会（道徳との関連含）



5年「花から実へ」



3年「昆虫の体づくり」



5年「ヒトのたんじょう」



4年「秋の自然」



6年「生物どうしのつながり」



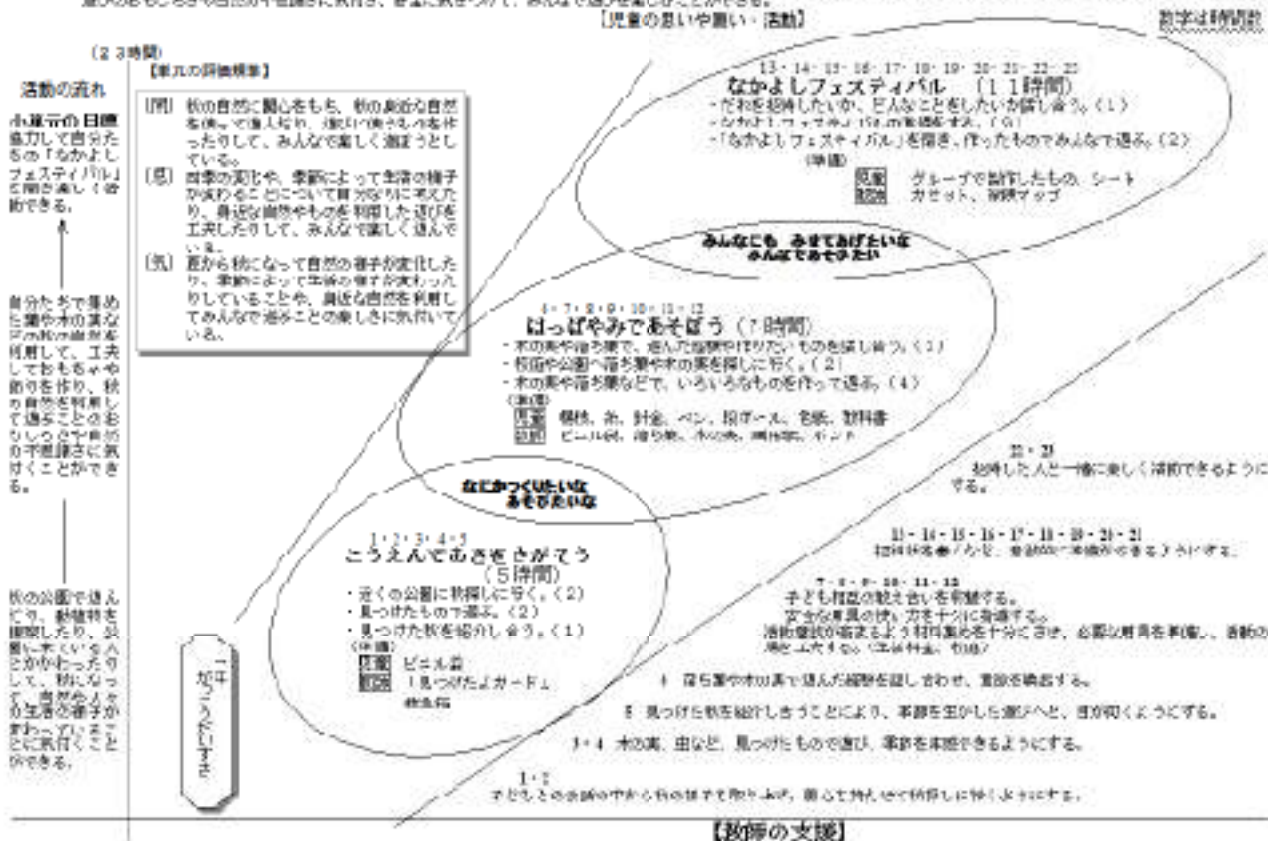
4年「自然愛」を主題とした
道徳の授業

② 生活科年間指導計画の見直し

本校の年間指導計画は、児童の意識の流れを中心に、図表で表されている。楕円が重なっている部分には、児童の思いや願いを記入し、それらが連続していることを示している。できるだけ小単元の数を減らし、くくりを大きくすることにより、児童や地域の実態に合わせて弾力的に扱えるようにした。

たのしさいっぱいあきいっぱい（10月～11月）

秋の収穫や公園で、身近な動植物の様子を観察したり、公園に生きている人どりのつたり、葉や木の葉を使っておもちゃや飾りを作ったり、遊び方を工夫したりして、遊びの楽しさや自然の不思議さに行き、安全に気づいて、みんなで遊びを楽しむことができる。



(2) 調査部

- ① 理科・生活科に対する意識調査や体験調査を行い、考察をして課題を明確にして進めた。
- ② 標準学力検査の分析を行い、課題を明確にした。
- ③ 理科好きな児童の育成のために「自然体験だより」を発行し、保護者への啓発を図った。

(3) 環境部

- ① 校内展示や理科コーナーの工夫改善



関連図書コーナー



飼育栽培コーナー



体験コーナー



読み物コーナー

② わくわく広場の科学体験コーナー・生活科コーナーの工夫改善



自然の不思議さコーナー



新発見コーナー

4 研究の成果と課題

(1) 成果

〔理科〕

- ・2年間の取組を引き続き継続し、さらに学習の定着を図ることができた。
- ・データのグラフ化や話し合い活動の工夫で、協同的な活動ができ、課題を解決することができた。
- ・少人数での実験の場を設定し、児童一人一人が直接自然と関わることができ、直接的理解に繋がった。

〔生活科〕

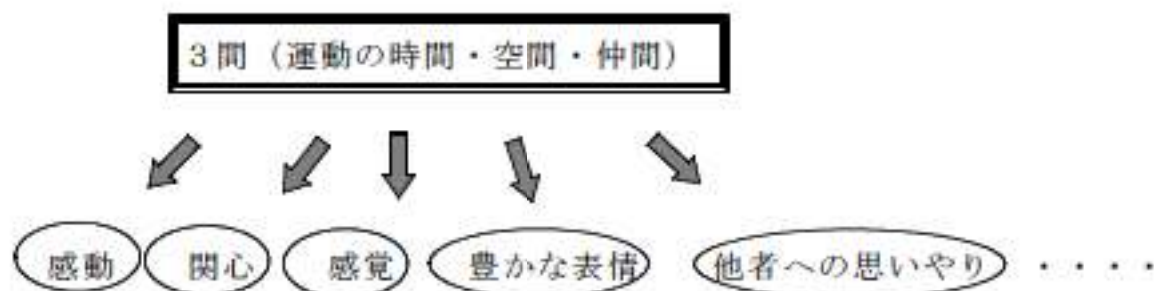
- ・体験の時間を多くしたことによって、児童の気づきを大切にすることができた。
- ・理科好きな児童が多いという状況を維持し、昨年度までの研究が、学力の向上にも結び付いている。

(2) 課題

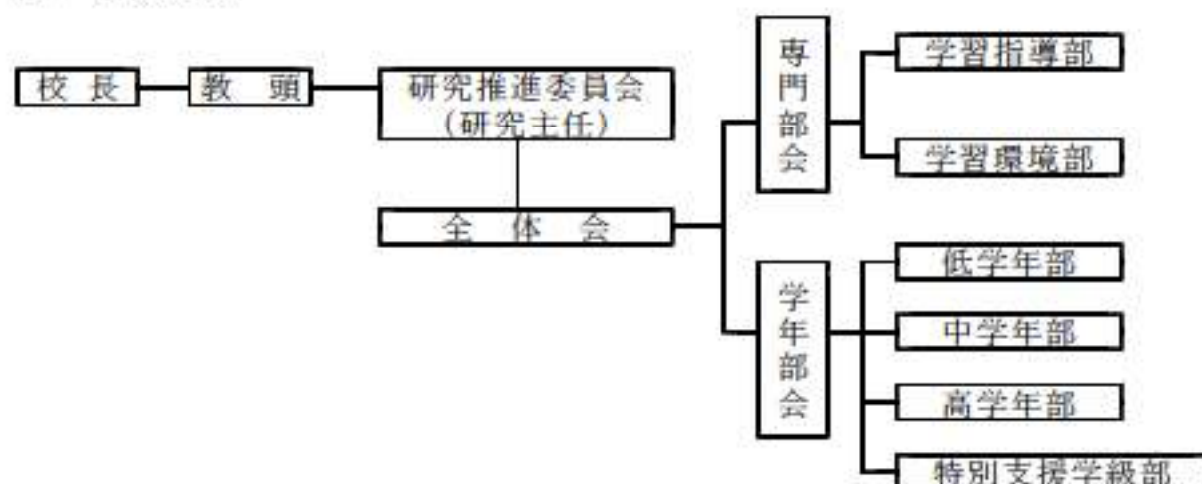
- ・グループでの話し合いの時に、自信をもって発表できるよう基本の話形や文型を作るなどし、3年生から指導をすすめていけるようにする。
- ・1年を通して長い期間で観察する単元については、指導に変化を持たせる、導入の仕方を工夫する等、児童の興味関心が継続できるようにしていく必要がある。
- ・理科に関する体験については、家庭の協力が必要なものも多いので、家庭地域への啓発活動や、連携を深めた指導を更に進められるとよい。
- ・体験を伴った理解は児童の思考に定着する。感動、驚き、喜びを実感できる場面を授業の中に入れていけるとよい。
- ・授業研究できる期限が限定されたり、対象物により実験観察がうまくできなかつたりということがあった。

運動能力は低いとはいえないが「ボール投げ」で、どの学年においても課題が残る原因は、経験や体験不足からステップ動作や腕の使い方、遠くに飛ばす感覚等が身に付いていないことにあると考えられる。投げる動作はバスケットボール、ハンドボールといった運動だけでなく、バドミントンのクリアー、ゴルフのスイングなどの打動作の基礎となる。体力・運動能力の低下傾向が就学前の児童から始まっている現在、授業において多様な運動をバランスよく取り上げ運動の質を高めるとともに、十分な運動時間を確保し運動量を保障する授業展開を目指さなければならない。

心と体を一体ととらえ、豊かな心と生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎となるたくましい体を育成するために本主題を設定した。



(3) 研究組織



2 研究の内容

体育の最大の魅力は、課題の達成と技能の向上にある。「できた・伸びた・達成した」喜びは何ものにも代え難い。授業の基礎的条件である学習規律の確立や授業の雰囲気作りをはじめ、喜びをともにする「仲間との関わり」も視点に置き授業を以下の点で見直すことにした。

- ・達成感や自己有能感を味わいやすい教材の選定開発
- ・伸びを実感できる評価方法やめあての設定
- ・運動の質と量の確保
- ・運動に取り組んでいない学習時間の充実

(運動のポイントや補助の方法等への理解を深める学習・自らの運動技能だけでなく仲間の運動機能向上にも関連する学習)

- 自ら学び（自主的・主体的に学び考える子）
- 明るく（誰とでも仲よく、思いやりのある子）
- 生きぬく（運動に親しみ、健康でたくましい子）

児童の実態

- ・明るく、素直である。
- ・休み時間に進んで運動に親しむ子とそうでない子の二極化が見られる。
- ・挨拶や返事を大きな声ではっきりと言えない。
- ・家庭の協力が得られず規則正しい生活が送れない児童がいる。
- ・友達とのかかわりなどコミュニケーション能力に課題がある。
- ・忍耐力や覇気に欠ける部分が見られる。
- ・学力の差が大きい。

地域の実態

- ・学区が狭く、住宅が密集している。
- ・思い切り体を動かす場所が少ない。
- ・育成会の体育的行事がある。（ラジオ体操・スポーツ大会）
- ・スポーツ団体が多いが偏りがある。（子どもが入れる団体が少ない）
- ・学校行事などで地域の方との交流があり協力的である。

社会的背景

- ・体力の低下
- ・運動の二極化・専門化
- ・生活習慣の乱れ
- ・メディア依存
- ・コミュニケーション能力の低下
- ・運動環境の変化
- ・運動時間・遊び場の減少

保護者の願い

- ・学校に楽しく元気に通ってほしい。
- ・友達と仲よくかかわってほしい。
- ・基礎的・基本的な学習内容を身に付けてほしい。
- ・怪我や病気をせず、健やかに成長してほしい。

教師の願い

- ・相手の立場や気持ちを考えた言動ができるようになってほしい。
- ・何事にも意欲をもって、前向きに取り組んでほしい。
- ・最後まであきらめず、粘り強く取り組んでほしい。
- ・進んで運動に取り組み、運動好きになってほしい。
- ・友達と進んでかかわり、協力して活動してほしい。
- ・心身共に健全な児童に育ってほしい。

社会の願い

- ・豊かな心の育成
- ・健やかな体の育成
- ・生きる力の育成
- ・言語活動の充実
- ・いじめの根絶
- ・確かな学力の定着

研究主題

豊かな心とたくましい体の育成

～仲間と豊かに学び、高め合う体育科授業を通して～

目指す児童像 仲間と進んでかかわり、できた喜びを分かち合える児童

- 低：誰とでも仲よく運動する児童（友達と励まし合って運動すること）
- 中：友達と協力して運動する児童（友達のよさを認め合って運動すること）
- 高：仲間と助け合って運動する児童（仲間と教え合って運動すること）

<研究仮説>

仮説1

課題解決に向けて、仲間と積極的にかかわり、充実した学び合いのある体育科授業の実践をすれば、豊かな心とたくましい体の育成ができるであろう。

仮説2

運動の特性や魅力に触れ、仲間と共にできた喜びを味わい、高め合いのある体育科授業の実践をすれば、豊かな心とたくましい体の育成ができるであろう。

<手立て>

- ①学習規律の徹底（共通理解）
- ②めあてのめたせ方の工夫（共通課題・個人課題）
- ③学習形態の工夫（ペア・グループ）
- ④言語活動の充実（学び合いの充実）
- ⑤学び合いの場面の工夫（学び合いの活性化）
- ⑥まとめの工夫（短時間で、相互評価）

- ①学習内容の明確化（系統性）
- ②技能分析（ポイント・コツ）
- ③指導方法の工夫（教師の言葉掛け）
- ④場の工夫（スモールステップ）
- ⑤まとめの工夫（技能の高まりの分析）
- ⑥指導と評価の一体化（次時への意欲）

研究推進委員会

学習環境部

学習指導部

3 実践事例

(1) 学習指導部

技能分析や指導法の工夫・改善についての研究を進めた。また学習の基盤を支える教師と児童、児童と児童の人間的関わりを深める「言葉がけ」についても実践を通じた研究を深めた。

技能分析例

	低学年	中学年	高学年
ボール運動系	【ボールゲーム】 ・いろいろなボールで、つく、転がす、投げる、当てる、捕る、蹴る、止めるなどの簡単な操作をすること。 ・ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたり、蹴ったりすること。 ・ボールが飛んだり、転がったりしてくるコースに入ること。 ・ボールを操作できる位置に動くこと。	【ゴール型】 ・ボールを持ったときにゴールに体を向けること。 ・味方にボールを手渡したりパスを出したりすること。 ・ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動すること。	【ゴール型】 ・近くにいるフリーの味方にパスを出すこと。 ・相手に取られない位置でドリブルをすること。 ・ボールを保持する人と自分の間に守備者を入れないように立つこと。 ・得点しやすい場所へ移動し、パスを受けてシュートなどをする事。 ・ボールを保持する人とゴールの間に体を入れて相手の得点を防ぐこと。

(2) 学習環境部

体育授業の約束事や指導の共通事項について研究し、月越小体育授業のスタイルの確立を目指した。



(3) 授業実践

第1回授業研究会	平成25年10月10日	第6学年	マット運動
第2回授業研究会	平成25年11月7日	第3学年	小型ハードル走
第3回授業研究会	平成26年2月10日	特別支援学級	ボールゲーム
第4回授業研究会	平成26年2月13日	第1学年	走の運動遊びゲーム

4 研究の成果と課題

<成果> ・授業の流れや指導について学校全体で共通理解することにより、日々の授業の向上にもつながった。

- ・友達との関わらせ方や技能向上の手立ての策が増えた。
- ・マネジメントを減らして運動量が確保できるようになってきた。

<課題> ・今年度は3つの領域にまたがって研究を進めてきたが、さらに効果的に研究を進めるためには見直す必要がある。

- ・教師と児童、児童同士の技能や人間関係を深めるための有益な言葉がけについてさらに研究を進める。
- ・掲示資料等教材教具の工夫改善と、それらの活用法を工夫する。

「たくましい体と心をもつ、南古谷っ子の育成」
～学習意欲を高め、運動の楽しさを味わう体育科指導の工夫～

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- 知・徳・体の調和がとれた、進んで運動を楽しむ児童の育成を図る。
- 運動の楽しさを味わえる授業の実践を図るため、「動く楽しさ」「集う楽しさ」「わかる楽しさ」「伸びる楽しさ」を意識した授業改善を図る。
- 児童のつまずきに合わせた場づくりを行い、スモールステップによる成功体験を重ねることで、着実に技能の向上を図る。
- 体育科授業、運動の生活科、環境の整備、保健調査の面から研究主題に迫る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 「動く楽しさ」「わかる楽しさ」「集う楽しさ」「伸びる楽しさ」を味わえる授業実践を通して、コツコツと体をきたえる子の育成を図る。
 - ア 活動欲求を満たす。
 - イ 児童の基礎・基本の習得を保証する。
 - ウ 運動技能の伸びを実感する。
- ② ペア学習・グループ学習を通して、運動の楽しさを共有できる児童の育成を図る。
- ③ 体育の授業から規律ある態度を身に付けることで、知・徳・体のバランスのとれた児童の育成を図る。

(2) 研究主題設定の理由

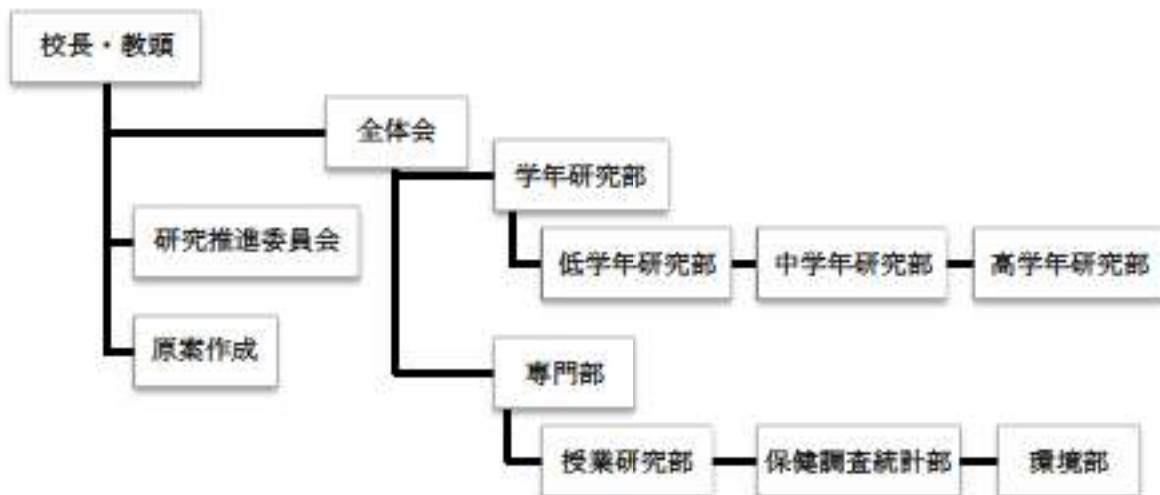
本校の運動に関する環境は決して恵まれているとはいえない。児童数の急激な増加に伴い、狭い運動場にひしめき合いながら休み時間を過ごしたり、体育の学習に取り組んだりしている。

また、生活習慣もよいとは言えない状況である。睡眠時間が短く、起床時間が遅い、朝食等の欠食が見られる児童もいる。それらの問題行動から、ストレスや不安、よりよい学習習慣、運動習慣が身に付きにくい状況にあり、望ましい生活習慣の確立が求められている。

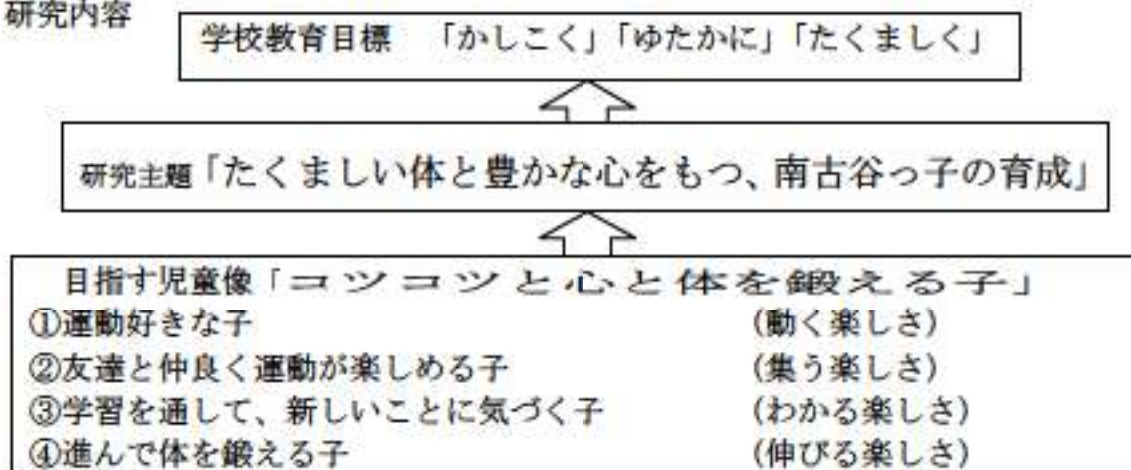
新体力テストにおいて、この数年間は、やや数値の向上が見られるが、全体的には低い。平成24年度県平均との比較では、男子が全48項目中19項目、女子では48項目中15項目しか県の平均を上回ってない。また、児童の体力ランクについても男子はAランクが11.6%、Bランクが30.9%、女子はAランクが13.3%、Bランクが28.2%と、県が掲げるA、B、Cランクあわせて80%にはほど遠い。特定の運動技能は高いが器械運動やボール運動は苦手等の運動の偏りが見られる。

そこで本校では、児童の実態の把握、発達段階を考慮した指導計画の作成、運動技能の確実な定着と体力の向上を図る指導、規律ある態度や生活習慣の確立に向けた保健指導の充実が必要であると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究内容

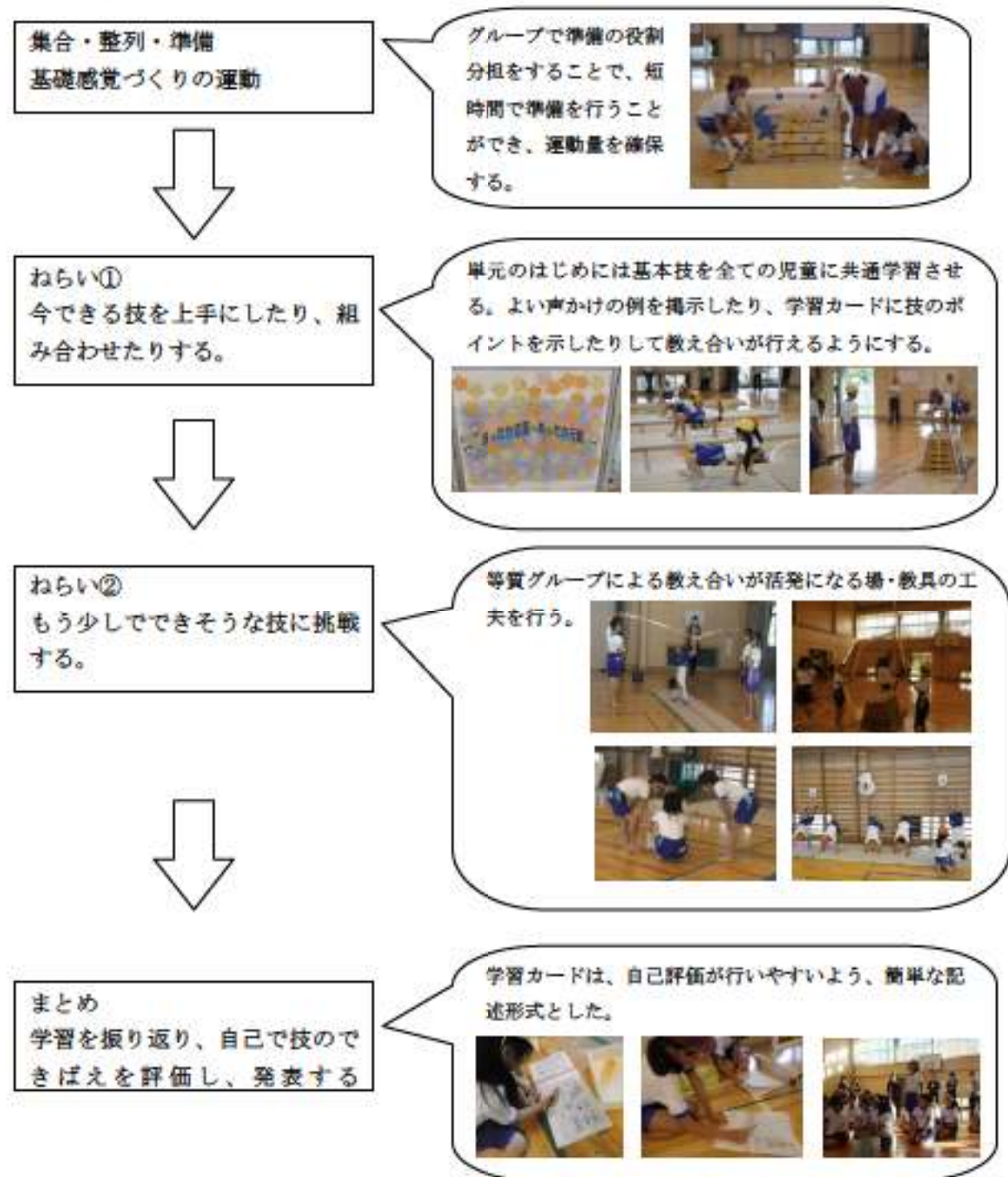


<p>仮説 1</p> <p>『児童一人一人にめあてを明確にもたせれば、主体的に運動に取り組むことができるであろう』</p>	<p>千立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 学習規律の徹底 (運動量の確保) ② めあてのもたせ方の工夫 (対面・対人の工夫・指導) ③ 学習内容の明確化 (系統性・技能分析) ④ 指導方法の工夫 (場の工夫・教材教具) ⑤ まとめの工夫 (技能の高まり)
<p>仮説 2</p> <p>『ねらいに迫るために、学習の場作りや用具の使い方を工夫すれば、指導内容の定着や技能の向上が図れるであろう』</p>	<p>千立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 技能の分析 (ポイント・コツ) ② 場の工夫 (スモールステップ) ③ 慣れの運動の工夫 (主運動につなげる工夫) ④ 小道具の活用 (授業効率・技能向上) ⑤ 教師の関わり (言葉かけ・称賛・補助)
<p>仮説 3</p> <p>『学習カードを工夫し、ねらいに即した評価をすれば、教え合い、高め合うことができるであろう』</p>	<p>千立て</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 言語活動の充実 (学び合いの充実) ② まとめの工夫 (短時間で、自他評価) ③ 学習形態の工夫 (ペア・グループ) ④ 学び合いの場面の工夫 (等質グループ・異質グループ) ⑤ 学習カードの工夫 (記述・選択、課題・内容・方法)

3 実践事例

(1) 授業実践例

- ① 5年5組 内野 明光 教諭 「跳び箱運動」
- ② 1年5組 西牧 美樹 教諭 「体ほぐしの運動・マットを使った運動遊び」
- ③ 4年1組 遠山 美保 教諭 「マット運動」



(2) その他の取組

① 体育実技伝達講習会

牛子小学校と合同で実技伝達講習会を行い、省スペースで「ゴール型・ベースボール型」における運動量を高める実践方法や「器械運動」における補助の仕方・児童のつまづきが多いポイントに対する支援方法について研修を行い、指導力の向上を図った。

② 視覚教材の充実による自主的な取組

児童が主体的に練習できるよう、技のコツやポイントが明記された掲示物を鉄棒・プール・体育館へ設置した。



③ つまずき別の活動が明確になる学習用具

等質グループ別の学習の際に、主体的に練習に取り組めるよう運動の場によって練習内容が明確に表示されている学習ボードを設置した。児童同士による教え合い活動が活発になり、進んで練習に取り組む児童が増えた。



④ 体力アップカードへの取組

家庭で自主的に取り組める「ブリッジ」「カエル倒立」「お家の人と考えた運動」等の運動が明記された「体力アップカード」を配布し、保護者から励ましのコメントを記入してもらうことで、継続して取り組めるようにした。



⑤ 生活習慣カレンダーの実施

規則正しい生活について、家庭と連携して見直しを図ることで学習に取り組むための基盤となる健康な身体作りに対する意識の向上を図った。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 体育科授業のスタンダードな進め方を教職員が理解することで、体育の授業の質を向上することができた。
- ② 学習の場や掲示物を工夫することで、見通しをもって学習に取り組めるようになり、児童の運動量を増やすことができた。また、発達段階に応じて意図的に異質・等質グループをつくることにより教え合い活動が活発になり、称賛する声かけも増加した。
- ③ 学習カードの工夫やペア学習・グループ学習を通して、個々のめあてに即した評価及び指導を行うことができた。

(2) 課題

- ① 児童一人一人のめあてを明確にするため、児童が自分のめあてを言えるようにする必要がある。今後は、具体的なめあて発表のモデルを示し、繰り返し授業の中で取り組んでいく。
- ② 児童が自分のつまずきに合った場を選択できるようにするためには、教師の支援が必要である。自分のつまずきが分かる学習カードを作成し、どういう状況になったらできているのかを明確にしていく必要がある。
- ③ 児童数・学級数が年々増加していく本校に即した体育科年間指導計画の見直し・改善が必要である。その中で、本校の児童の実態に合った系統的な指導が図れるように明示していく必要がある。また、効率よく学習を、技能や体力の向上を図れるように学習用具や場、学習形態の工夫・改善を引き続き図っていきたい。

「学びのよさを味わえる子どもの育成」

～算数科における指導法の工夫・改善を通して～

川越市立大東東小学校

研究のポイント

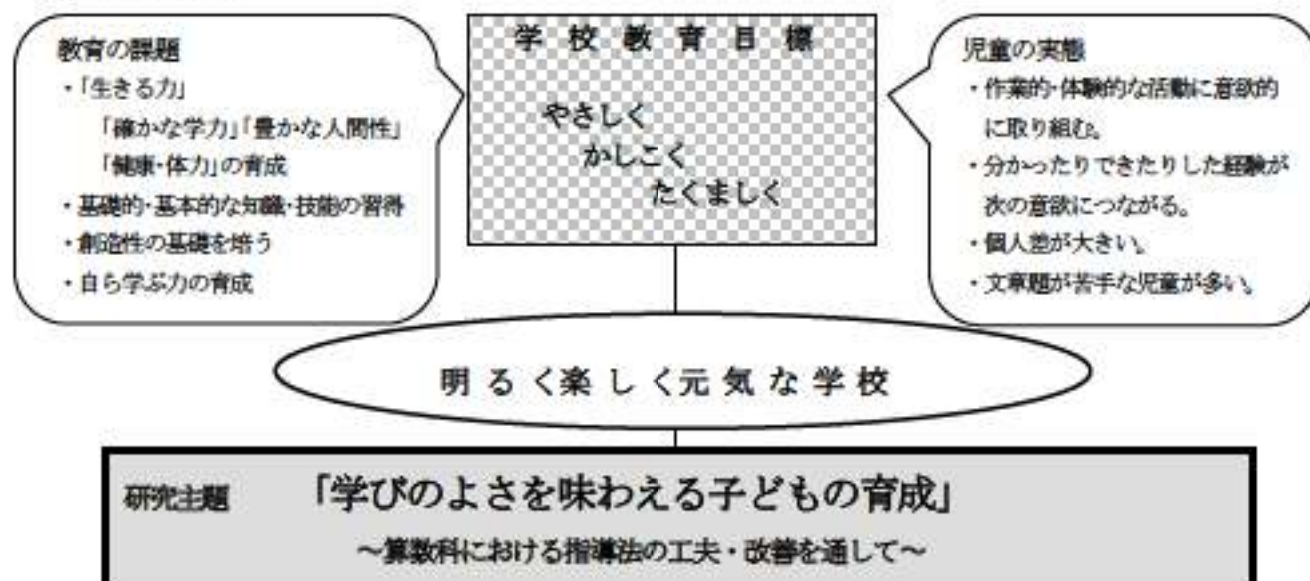
- 研究委嘱校となる前年度から算数科の教科研究を始め、3年構想で進めている。
- 「算数が好き、楽しい」という児童の育成を目指し、教師の指導力向上を図る研究を授業研究センターに進めている。
- 全職員が研究の共通理解をするため、原案作成委員会において早めの提案作成と情報提供資料や文書の定期的な配布をしている。（今年度インフォメーション30回発行）
- 全職員が同じ授業の流れで指導をくり返すことで、進級した時の児童が感じる学習の壁（指導法の違い）をなくす。

1 研究の概要

(1) 研究主題の設定理由

研究教科に算数科を選択し、「すべては子どもたちにとってプラスになる研究」を進めていけるように、研究主題を昨年と同じ「学びのよさを味わえる子どもの育成」と設定した。そこで今年度の柱として、まず「学びのよさ」を追及していくことを目標に据える。次に、子どもたちが「学びのよさ」を味わうためには、算数科における「学習意欲」と「確かな学力」が必要になる。さらに、……というように目標到達への段階を考え、研修を進めていきたい。

(2) 研究の構想



めざす子ども像 「学びのよさを味わえる子ども」

☆昨年度の成果から

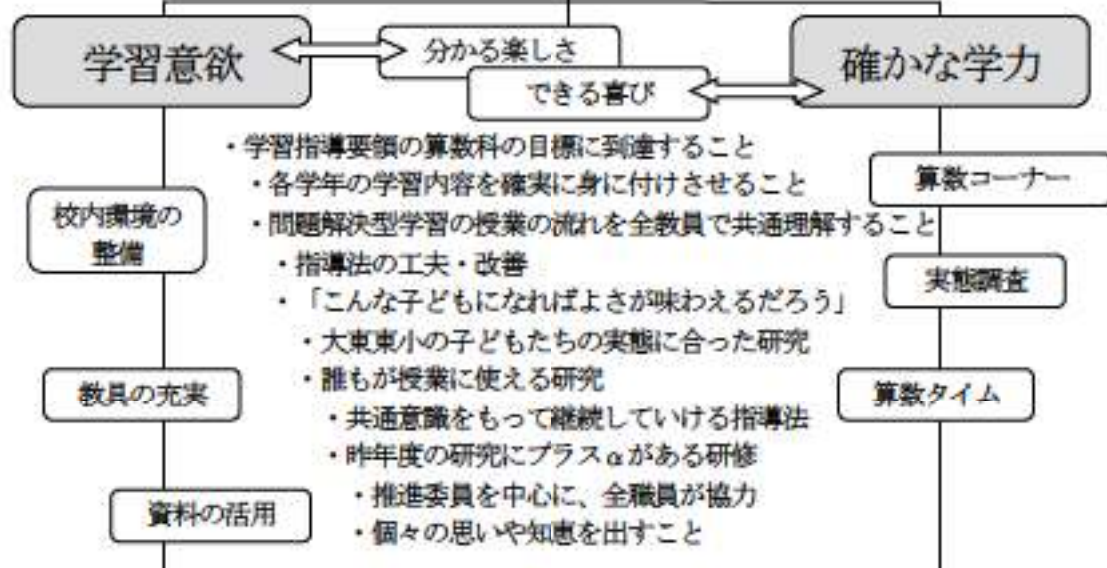
子どもたちの算数への見方が変わった

テストがよかったから「楽しい」「面白い」になった

「できる」「知っている」ようになることで、
考え方の可能性が広がる

《学習指導要領》

算数的活動を通して、数量や図形についての基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、日常の事象について見通しをもち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、算数的活動の楽しさや数理的な処理のよさに気づき、進んで生活や学習に活用しようとする態度を育てる。



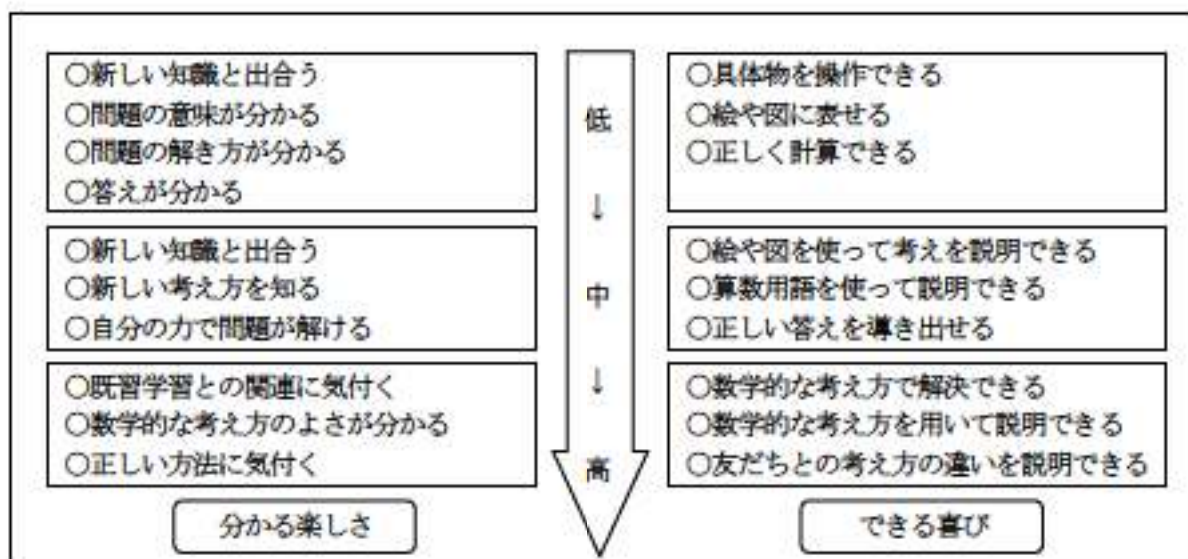
	めざす子ども	研究の仮説
低学年	◇学習の進め方がわかり、意欲的に問題に取り組む子	・学習の進め方が分かり、自力解決の支援を工夫すれば、活動や課題に意欲的に取り組むであろう。
中学年	◇自分の考えをもち、意欲的に学習に取り組む子	・既習内容を生かす指導をくり返し、基礎・基本が定着すれば、自分の考えをもつことができるようになるであろう。 ・自分の力で問題を解決したり、自分の考えを説明したり、友だちの考えと比べたりできれば、学びのよさを実感し学習への意欲が高まるであろう。
高学年	◇学んだことを生かし、教え合い高め合うことができる子	・系統性を意識して指導し、基礎・基本が定着すれば、学んだことを生かすことができるであろう。 ・児童の実態に応じて学び合う場を工夫すれば、教え合い高め合うことができるようになるであろう。

授業づくりの視点

- (1) 学習意欲をもたせるために
- (2) 基礎基本を身に付けさせるために
- (3) 考えを深めさせるために
- (4) 学び方を身に付けさせるために

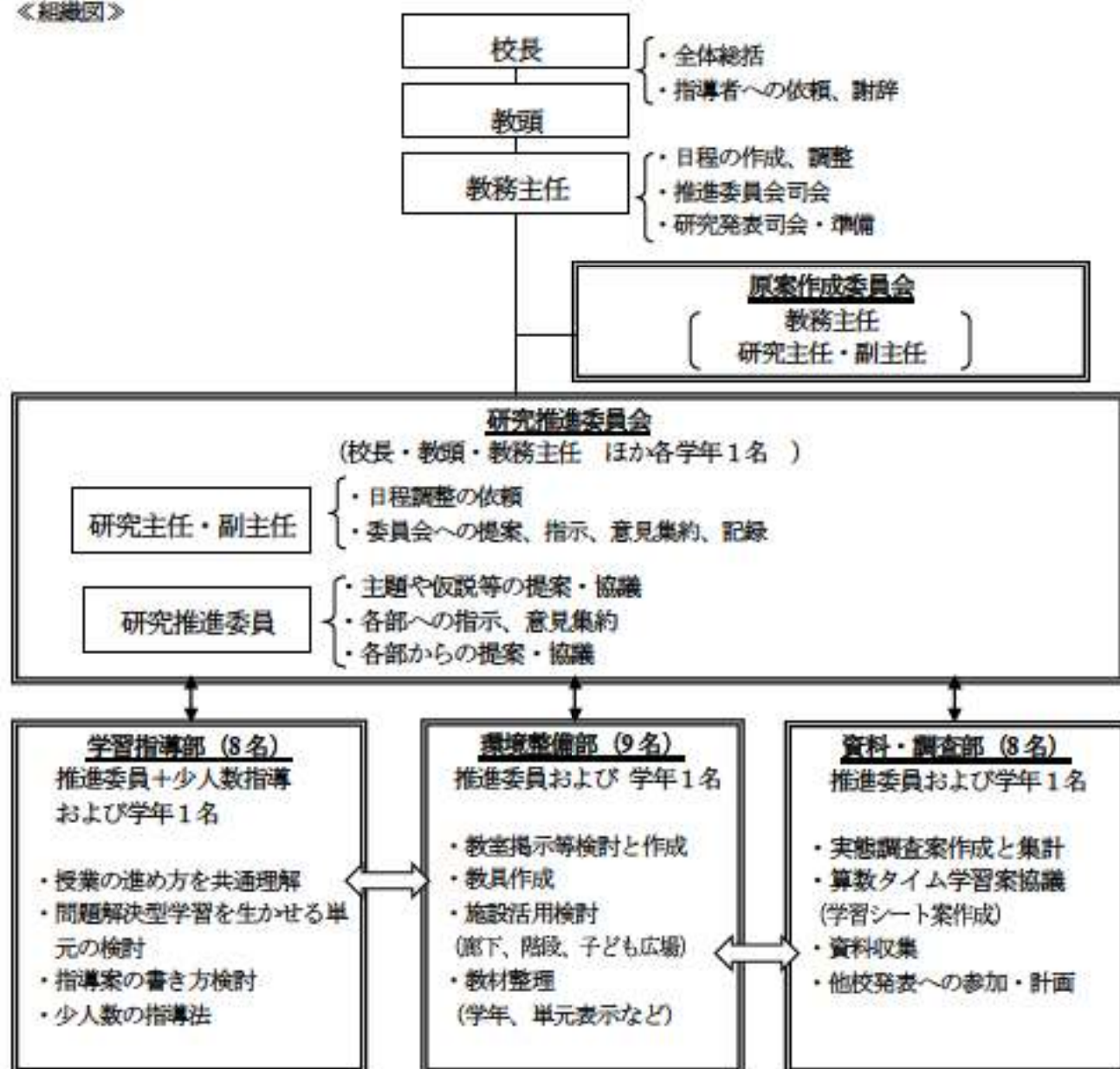


「導入の工夫」
 「支援の工夫」
 「練り上げの工夫」
 「まとめの工夫」
 「発展の工夫」



(3) 研究組織

〈組織図〉



2 研究の取組事例（4年生より抜粋）

1 児童の実態

本学年は算数が好きな児童が多いが、意欲に波があり、問題を解く見通しが立たないとすぐ諦めてしまうという課題もある。また、見直しなどの確認がほとんど見られない。

2 取組内容

- ・問題解決型学習および習熟度別学習の流れを身に付けさせるように、簡略化した指導案を作成し、学年で統一した（またはコースによる段階を考えた）授業を展開した。また、学年が進んだときのノートの使用法が共有、継続できるように、ノート指導も統一した。
- ・「見通す」段階において、「見積もりを出す」ことをくり返しイメージさせるようにした。
- ・既習内容が活かせるように、算数コーナーに多様な考え方や既習のまとめを掲示した。
- ・児童から出た言葉を使って、本時の課題やまとめとなるようにした。
- ・コースによって適用問題の難易度を考え、時間配分にも配慮した。

3 成果と課題

- <成果>・習熟度別学習の流れが分かり、自分の学習のペースに合わせたコースを選択できるようになってきた。分からないところを質問するようになってきた。
- ・算数コーナーなどから既習内容を見つけ、自力解決に生かそうとする児童が増えた。
 - ・課題やまとめが自分たちの言葉を使って書けるようになってきた。
 - ・昨年度の指導の積み重ねがあり、授業の進め方を理解している児童が多い。
- <課題>・コース別指導では、各学級の学習内容の理解度を把握するのが難しい。
- ・少人数担当の時間合わせが難しい。

3 全体の成果と課題

(1) 児童について

- ・昨年度からの取組で授業の流れに慣れてきた。特に自力解決の仕方で、既習事項を確認する方法（算数コーナーや前時までのノートなど）を身に付けた。
- ・教育に関する3つの達成目標の効果の検証により、計算に関する学力が上がってきている。
- ・学力の個人差に対応する支援方法については、習熟度別学習や授業内での小集団指導などで一定の成果が上がっているが、理解が進まない児童についての支援は難しい。

(2) 指導上の観点

- ・教師も問題解決型の授業に慣れてきた。全校で同じ流れの授業が展開されている。
- ・様々な練り上げの方法があるため、すべて同じように進めるのは難しく、一時間ごとの教材研究に時間がかかる。

研究主題

「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら進んで学ぶ子の育成」

～学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して～

川越市立霞ヶ関小学校

研究のポイント

- 授業の中で、児童自らが考えを深めることができる指導方法を工夫することにより、科学的な思考力の向上を目指す。
- 理科や生活科の関心が高まるような環境を整備することにより、自ら学ぶ児童の育成を目指す。
- 授業の中で、学びあい、高めあう場の設定を工夫することにより、より深い知識の定着を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

理科・生活科の授業において「考えを深める指導の工夫」「学びあい、高めあう場の設定」を通して、児童の科学的思考力の向上、より深い知識の定着を図る。

(2) 研究主題設定理由

理科離れ、理科学力の低下が叫ばれて久しいが、本校においても楽観を許さない状況となっている。平成23年度の埼玉県小・中学校学習状況調査では、理科正答率、県73.0%に対して、本校70.47%となっている。家庭学習の不足等、様々な要因が考えられるが、授業内容を改善し、理科に対する関心意欲を高め、科学的思考力の向上、知識の定着が急務であると考え、平成24年度より理科・生活科を中心に学校研究を進めた。

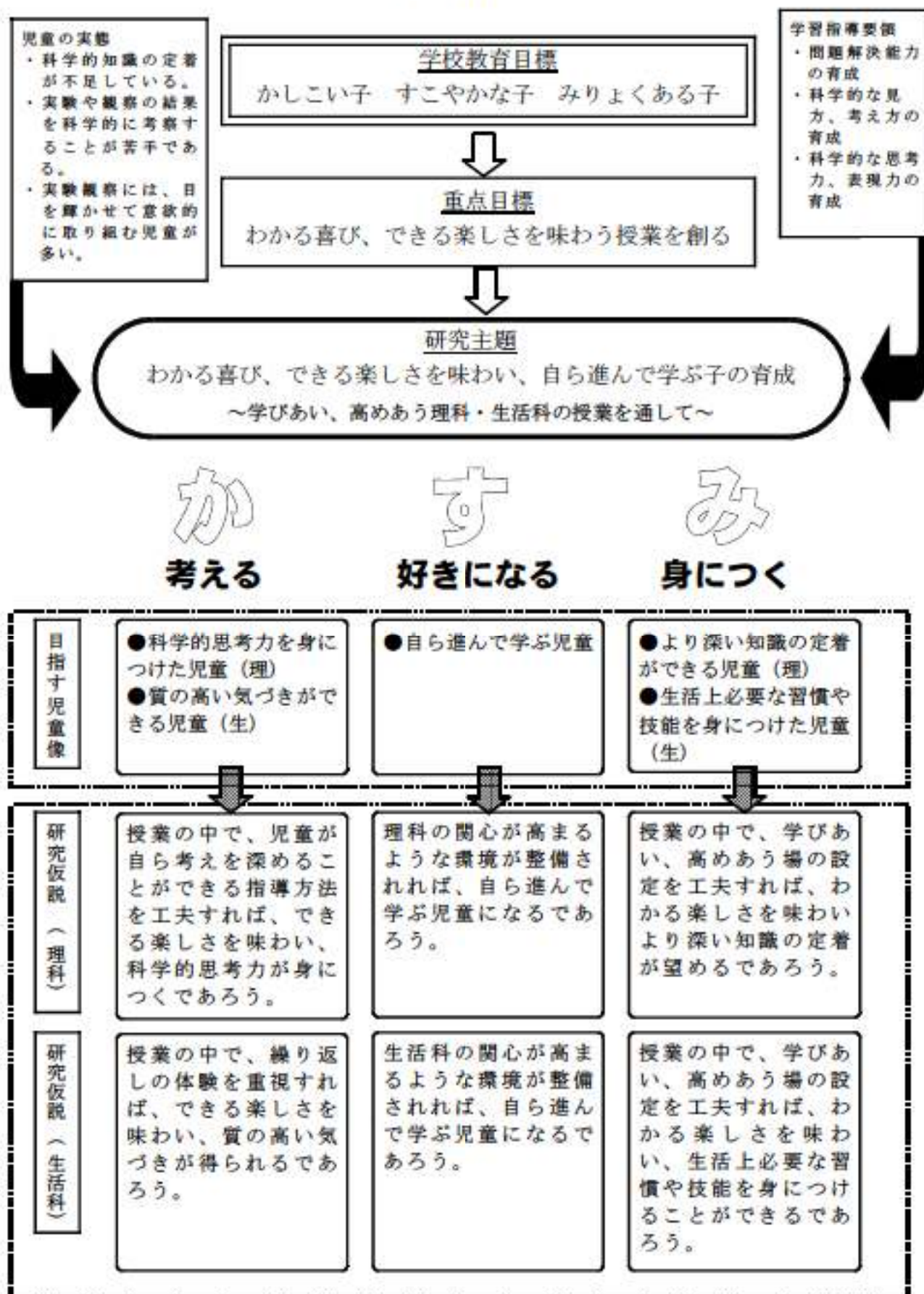
平成25年度からは、研究主題を「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら進んで学ぶ子の育成」副題を「学びあう・高めあう理科・生活科の授業を通して」として、研究に取り組むこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

研究全体構想



3 実践事例

(1) 授業実践例 (第3学年 しぜんのかんさつ (2) いろいろなこん虫のかんさつ)

① 研究主題との関わりについて

研究 主題	「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら進んで学ぶ子の育成」 ～学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して～
----------	--



仮説1	授業の中で、児童が自ら考えを深めることができる指導方法を工夫すれば、できる楽しさを味わい、科学的な思考力が身につくであろう。
-----	--

手立て1: 昆虫採集や飼育を通して、さまざまな種類の虫に触れ観察し、比較することで違いや共通性に気づくようにする。

仮説2	理科や生活科の関心が高まるような環境が整備されれば、自ら進んで学ぶ児童になるであろう。
-----	---

手立て2: 昆虫を自分自身で採集したり、教室内で昆虫を飼育したりする活動を通して、昆虫に対する興味を育てる。

仮説3	授業の中で、学びあい、高めあう場の設定を工夫すれば、わかる楽しさを味わいより深い知識の定着が望めるであろう。
-----	--

手立て3: 単元の最後の時間に学んだことを使ってクイズをつくり、友だち同士で出題しあうことで、友だちと学びあい、知識の定着を図る。



学習したことをもとにクイズ作り



「クモは昆虫でしょうか?」「ハイ、ハイ!」

② 本時の学習

本時は手立て3の実践

ア ねらい

- ・身の回りの昆虫に興味をもち、昆虫の体のつくりや育ち、暮らしについてのクイズをつくろうとしている。
- ・身の回りのいろいろな昆虫を比較しながら、その特徴が違うこと、生活場所や食べ物に適応していること、その育ちには一定の順序があること、体のつくりについて理解している。

イ 展開(㊦)は、「身につく」つまり定着のための手立てを表している)

学習活動・学習内容	主な教師の発問(T)児童の反応(・)	留意点(○)評価の観点(☆)	分
1. 前時までの学習をふりかえる。	T: 色々な種類の昆虫を観察しましたね。どんな昆虫がいたかな。	○前時までに使用している写真または絵を掲示する。	10
2. 本時の課題を知る。	T: 今日ではまとめとして、みんなで昆虫クイズ大会をしたいと思います。	○色画用紙にキーワードを書いたものを掲示する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 課題 いろいろな昆虫クイズを出し合って、さらに昆虫についてくわしくなろう。 </div>			
3. 昆虫に関するクイズ作りをする。 ㊦学んだ事からクイズをつくる。	T: 復習したことの中から、1人ずつクイズを作ってもらいます。	○ワークシートに作ったクイズを書けるよう助言する。 ☆昆虫の体のつくりや育ちに違いがあることを理解している。 (記録分析)	15
4. 考えたクイズをグループ内で出し合う。 ㊦つくったクイズ等を発表し合う。	T: では、作ったクイズを班の友達に出しましょう。 T: おもしろいと思った人の問題を発表してください。	☆進んでクイズの答えを考えようとしている。(発言) ○良いものを見つけて全体に紹介する場を設定する。	15
5. 本時のまとめをする。	T: どんな感想を持ちましたか。ワークシートの評価の顔の色を塗りましょう。	○本時の学習を振り返らせ、定着を図ることができる場を設定する。	5

4 成果と課題

- 「まとめ」の学習過程において、「視覚化」「動作化」「言語化」等を通して表現活動を行うことが、学習内容の定着に効果的であることがわかってきた。
- 「考察」の学習過程において、「話形(～なので、～なことがわかる 等)」を使うことが、児童の思考を助ける手立てになることがわかってきた。
- 授業の過程を示す黒板用掲示物(課題・仮説・実験・等)を全クラス分作成したことで、授業の流れが教師、児童ともに一目で確認できるようになった。
- 気づいたことを書く、わかったことを書く等の「書く」活動が、気づきの質を高めることがわかってきた。
- ノートの形式を統一し、わかりやすく児童に示すことができたので、ノートをしっかりとれる児童が増えた。
- 「話形」は、思考の助けになったが、同じような表現ばかりになってしまう部分もあるので、キーワードから文を作るなど、発達段階に応じた使い分けが必要である。
- 実験の予想を話し合う時間や定着のための時間の確保を、指導計画作成の段階で練っておく必要がある。

「いきいき表現 育てよう確かな力」

～一人一人の願いや思いを大切に、豊かな表現のできる児童の育成～

川越市立霞ヶ関南小学校

研究のポイント

- 表現の積み重ねや育てたい力を明確にした授業実践
- 表現主題を追究したくなるような仕掛け
- 互いに認め合う鑑賞指導の充実

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の児童は、素直で穏やかである。しかし、自分に自信がもてずに自分の思いを表現することが苦手である。その原因として、自己肯定感がもてない児童の多いことが挙げられる。

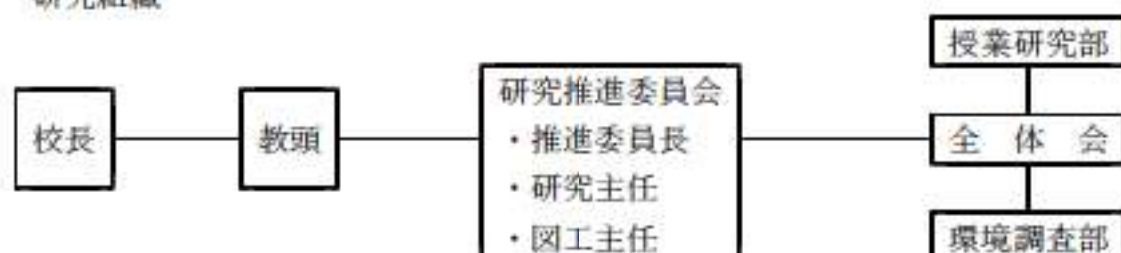
そこで、自分の思いを表現する力を高めることで、自己表現する喜びを味わわせ、児童一人一人の情操を養い、自分に自信をもたせ、生き生きと活動できる児童を育成することをねらいとして、本研究を実施することとした。

(2) 研究主題設定理由

「確かな力」とは、子ども達が自分の感覚や活動を通して、感性を働かせながら形や色をとらえる力、自己のイメージを持つ力、自分の思いや願いを表現する力のことである。

それらの「確かな力」を「育てる」ために、教師は、児童一人一人のその子らしい「思い」を的確につかみ、その子の「思い」を共感的に受け止めなければならない。そして、その子の「思い」に基づいた造形活動が豊かに表現できるよう、十分な手立てと評価の工夫をしなければならない。「いきいき表現」とは、そのようにして具現化された児童の表現活動の様子を指す言葉である。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

- ① 授業者が子ども達一人一人の造形活動を共感的に見つめ、その姿の中に表れた子どもの「心」をしっかりと受け止めていけば、児童がいきいきと表現することができるであろう。
- ② 児童の「思い」に基づいた造形活動が豊かに表現できる手立てと評価の工夫を行

えば、「育てたい確かな力」が身につくであろう。

(2) 研究主題に迫るための手立て

- ① 表現の積み重ねや育てたい力を明確にした授業実践
 - ア 系統性を見直し
 - イ 具体的な評価規準
 - ウ 題材目標の見直し等
- ② 表現主題を追求したくなるような仕掛け
 - ア 本校の子どもの実態を踏まえた、子どもにとっての魅力的な題材の工夫・開発
 - イ 自分の思いを表現したくなる材料、用具の開発等
- ③ 互いに認め合う鑑賞指導の充実

3 実践事例

(1) 講演会 「子ども達の思いを表現させるための授業とは」(平成25年6月26日)

講師：国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官
文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官 岡田京子先生

(2) 実技研修

- ① 「ワクワクする題材を子ども達に(新しい技法の提案)」(平成25年4月15日)
講師：本校校長 石野道子
- ② 「題材研究の具体的なポイント」(平成25年8月1日)
講師：本校校長 石野道子
- ③ 「ポストカード作り・ストロー笛作り」(平成25年8月26日)
講師：元埼玉県美術教育連盟連盟長 山屋敬典先生
- ④ 「新聞を使っての造形遊び」(平成25年8月28日)
講師：岡田京子先生
- ⑤ 「ギャラリートーク」(平成25年8月22日) 於：川越市立美術館
講師：川越市立美術館主幹 田中晃先生

(3) 授業研究 ※指導者は、いずれも岡田京子先生

- ① 第6学年2組「ピカソのように ～自分を表現しよう～」(平成25年9月9日)
授業者：阿部美沙子教諭
- ② 第4学年1組・霞ヶ関中学校2年2組合同「タカラノカタチ ～ふれあいの中から作品を生み出す～」(平成25年10月2日)
授業者：小松裕子教諭・霞ヶ関中学校 赤地桜教諭
- ③ 第1学年1組「紙をくしゃくしゃ、何かができた!!」(平成25年11月18日)
授業者：加藤はる美教諭
- ④ 特別支援つくし学級「ころころローラーのさんぽみち」(平成26年1月14日)
授業者：鴨下友恵教諭
- ⑤ 第5学年合同「6年生へ!! ～形・色・模様・材料のよさを生かして思いを発信しよう～」(平成25年2月21日)
授業者：萩原秀基教諭・根本春菜教諭

(実践風景)





4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

年間を通して、教師自身が多くの実技研修を行うことができた。それにより、研究のねらいである「自分の思いを表現する力を高めることで、自己表現する喜びを味わう」ことを、実感をともなって理解することができた。

さらに、実践事例の中には出てこないが、日々の図工授業において、指導者でもある本校校長に相談し指導を受けることで、これまでとはまるで違う「その子の『思い』」に基づいた造形活動が豊かに表現できる」「十分な手立てと評価の工夫」のある授業が行われるようになった。その結果、作品の質は飛躍的に高まり、各種展覧会で多くの受賞作品を生み、受賞者が列をなしてあふれて、朝会の時間内では賞状伝達が終わらないという事態が発生するほどになった。

また、こうした指導の手法を整理し、研究主題や研究仮説に照らして、さらに細部を詰めて検討しまとめるために、5つの授業研究会を実施することができた。これにより、授業を構成する要素の一つ一つの意味を確認し、実践を体系的な指導手法として確立することができた。

(2) 今後の課題

研究推進委員会で、来年度の研究発表を低中高特の4クラスで行うことを確認し、その他、研究発表日に照準を合わせて必要な準備と日程を決めていくことを確認した。また、①1年から6年までの系統表の作成 ②技法の解説テキスト（製作過程表）づくり ③さらなる環境整備 についても取り組んで行くことなどを決めた。

「進んで運動に取り組む運動好きな山田っ子の育成」 ～仲間と豊かにかかわり、「できる」「わかる」「のびる」学習指導の工夫～

川越市立山田小学校

研究のポイント

- 仲間と豊かにかかわり、「できる」「わかる」「のびる」喜びや自信を育み、進んで運動に取り組む運動好きな児童の育成を目指す。
- 実習や実験等を取り入れた保健学習の指導の工夫と授業の充実を図り、心身ともに健康な児童の育成を目指す。
- 「跳の運動（陸上運動）」「跳び箱を使った運動（器械運動）」に視点を当てた学習指導の工夫と授業の充実を図り、教師の授業力の向上を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

目指す児童像を想定した指導を行い、仲間と豊かにかかわり、進んで運動に取り組む運動好きな児童の育成を図る。

学校教育目標：「かしこい子 思いやりのある子 たくましい子」

目指す児童像：「進んで運動に取り組む運動好きな山田っ子」

低学年の目指す児童像

- ・友達と仲良く運動する児童
- ・めあてに向かって、思い切り運動する児童
- ・健康について考える児童
- ・進んで体を動かす児童

中学年の目指す児童像

- ・仲間と励まし合って運動する児童
- ・めあてを明確にし、思い切り運動する児童
- ・自己の健康について知り、健康のために努力する児童
- ・仲間と進んで体を動かす児童

高学年の目指す児童像

- ・仲間と教え合い、高め合って運動する児童
- ・自己のめあてを明確にして、その解決に向かってねばり強く運動する児童
- ・自己の健康について理解し、健康のために実践する児童
- ・仲間と進んで体を動かす児童

(2) 研究主題設定の理由

本校児童は、体育科授業においては、自分が得意とする運動種目、できる運動種目については進んで運動に取り組み、精一杯活動している。しかし、一方で「できない動き（技）に取り組む」という活動になると児童の学習意欲は停滞し、「無理」「できない」と言って、あきらめてしまう傾向にある。自信のなさや課題解決に対する見通しが持てない不安から消極的になってしまうため、教師が場の設定を易しくしたり、課題となる運動（取り上げる運動）のポイントやコツを示したりすると進んで運動に取り組むことができると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説

- ① 運動量を十分確保し、運動の特性に触れる授業を展開すれば、児童は、運動する楽しさ、心地よさを味わい、仲間と進んで運動に取り組むことができるであろう。
- ② 実習や実験等を取り入れ、養護教諭等との連携を図った学習指導を展開すれば、児童は、実践的な理解を深めることができるであろう。
- ③ 運動遊びの生活化を図る環境を整備すれば、児童は進んで運動（遊び）に取り組む、運動の楽しさや心地よさを味わい、進んで体を動かすことができるであろう。

(2) 具体的な手立て

【仮説①】

- ① 運動量の確保と運動の特性に触れる学習指導の工夫
- ② 効率よく技能を身に付けさせるための指導内容の明確化と教材・教具の工夫
- ③ 仲間と豊かにかかわり、互いに認め合い、教え合う学習内容の展開と工夫

【仮説②】

- ① 実習や実験等を取り入れた、実践的な理解を深める学習指導の工夫
- ② 養護教諭等と連携し、知識や理解を深める学習指導の工夫

【仮説③】

- ① 運動遊びの生活化を図るための環境整備
- ② 学級集団を核とした運動遊びの推進及び運動遊びの生活化

3 実践事例

(1) 授業実践

全学年で研究授業を実施し、2・3・4・6学年で研究協議全体会を実施した。

「跳び箱を使った運動・器械運動」では、教育センター指導主事 高村 勉 先生に、保健学習では、教育指導課指導主事 矢部 智史 先生に御指導いただいた。

- ① 第1学年 「びよんびよんランドで楽しもう」【跳の運動遊び】
- ② 第2学年 「みんなでめざせ、川ごえじょう」【跳び箱を使った運動遊び】



【慣れの運動】



【興味関心を高める工夫】



【場の工夫・認め合い、教え合いの場面】



③ 第3学年 「けんこうな生活」【保健学習】



【板書の工夫】



【実験：実践的な理解を深める工夫】



【話し合い活動の様子】

④ 第4学年 「跳び箱運動」【器械運動】



【慣れの運動】



【指導内容の明確化】



【場の工夫・認め合い、教え合いの場面】



⑤ 第5学年 「走り幅跳び」【陸上運動】

⑥ 第6学年 「跳び箱運動」【器械運動】



【慣れの運動】



【場の工夫・認め合い、教え合いの場面】



【学習のまとめ】

(2) 専門部の活動

① 学習指導部

- ・指導案形式の統一
- ・実態調査の系統性の検討
- ・技（跳び箱運動）の系統表の明確化
- ・掲示資料の共通項目の検討
- ・形成的授業評価を取り入れた学習カードの作成
- ・学習過程の明確化

【学習カードの項目】

自己評価	今まで出来なかったことが出来るようになった
	第一歩、全力をつくして頑張ることができた
	互いに協力して、仲良く学習できた
	自分のためだけでなく、周りも頑張りましたか



移動式掲示板

② 環境整備部

- 授業の充実と運動遊びの生活化を図る環境を整備
- ・移動式掲示板3台作成
- ・ケンケンバロード3本作成
- ・なわ跳び板、バンダナボールの管理
- ・バトンスロー、パワーヒッターの設置と管理



バンダナボール





ケンケンパロード



なわ跳び板



バトンスロー

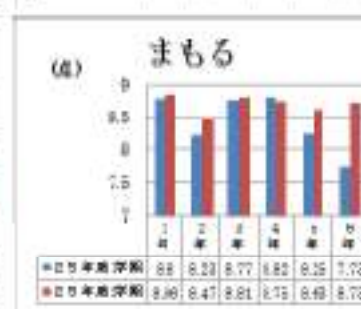
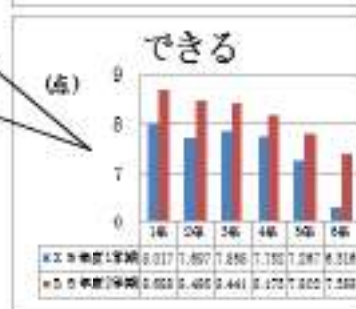
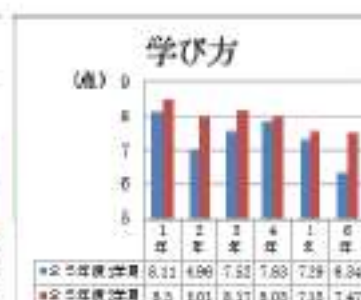
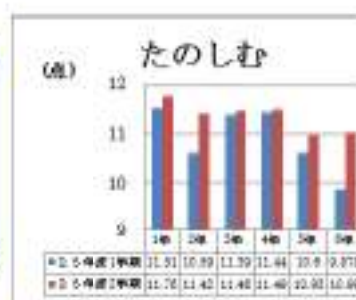


パワーヒッター

③ 調査啓発部

- ・ 診断的、総括的授業評価に関する研究と考察
- ・ 児童の調査に関する変遷と考察
- ・ 授業場面記録（期間記録）に関する考察

- これまで技術面を苦手としている児童が多かったが、運動を得意と感じ体育の学習を好む児童が増えてきている。
- 授業観察を取ることで、指導を客観的に観察することができ、研究をより深めることができた。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 「跳び箱運動」を偶数学年で行い、技の系統性を踏まえた学習内容を明らかにすることができた。また、児童のつまずきに応じたスモールステップでの練習の場や指導方法を明らかにすることができた。
- ・ 児童の実態に応じた学習を展開したことで、学習への意欲が高まり、自己のめあてを持って運動に取り組めた。その結果、確実に技能を身に付けることができた。
- ・ 保健学習では、実習を取り入れたり、養護教諭とチームティーチングを行ったりしたことで、児童は、実感を伴った理解を得ることができた。
- ・ 体力・投力向上教具の活用で、少しずつではあるが成果が出てきた。また、「マラソンカード」「なわ跳びカード」を統一したことで、児童の意欲が高まった。

(2) 課題

- ・ 限られた指導時間の中で、効果的に技能を身に付けさせる指導方法を工夫改善していく必要がある。
- ・ 運動（外遊び）を積極的に行わない児童に対して、外で体を動かす時間を意図的に設定するなどの環境整備が必要である。
- ・ 体力・投力向上教具を体育部員の協力のもと、継続して設置してきたが、さらに児童の興味関心を引き出していけるよう工夫改善が必要である。

「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究」 ～生徒一人一人の意欲を引き出す「わ・た・しの授業」実践を通して～

川越市立高階西中学校

研究のポイント

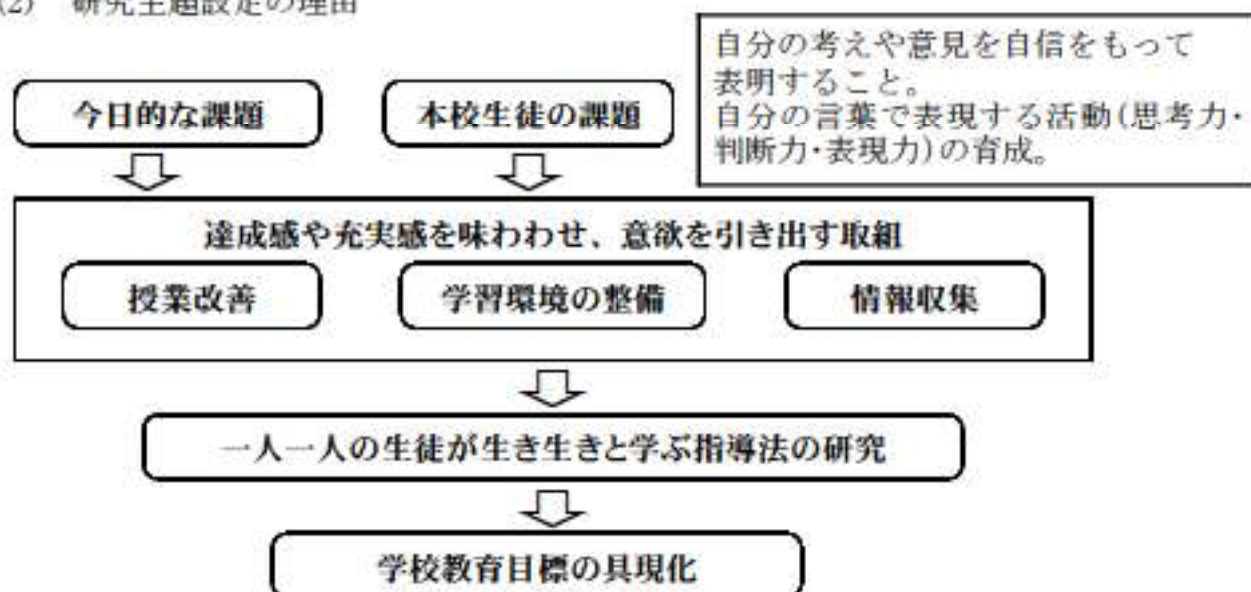
○学習環境を整え、知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ることにより生き生きと学ぶ生徒の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

現代の変化の激しい時代にあって、子どもたちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などを育成する教育が期待されている。「わかる授業」「楽しい(たのしい)授業」「生徒が主体的(しゅたいてき)な授業」の『わ・た・しの授業』を合い言葉に、生徒が主役となり、教師主導型の授業から、問題解決的な生徒主体の授業への転換をし、達成感や充実感を味わえる授業の取組と指導法について研究をする。

(2) 研究主題設定の理由



2 研究の内容

(1) 目指す生徒像

学校教育目標「自ら考え 行動する生徒」

目指す生徒像「自ら学ぶ生徒 自ら鍛える生徒
自らふれあう生徒」

目指す学校像「生徒が生き生きと活動し、
地域に愛され信頼され期待される学校」

自ら学び 自ら考え
生き生きと活動し 学ぶ

(2) 研究仮説

学習環境を整え、知識・技能の活用を図る学習活動や言語活動の充実を図ることにより、生徒が生き生きと学ぶことができる。

本校の今回の研究は、「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法」を具現化するために、教師が「わ・た・しの授業」を充実させ、基礎・基本を確実に定着させるとともに、授業における言語活動の充実が必要であると考えた。一人一人の生徒が生き生きと学ぶためには、まず基礎・基本の定着が必要であり、言語環境を整えることにより理解が深まり、思考力、判断力、表現力を育むことができる。そして、基礎的・基本的な内容の確実な定着を実現するためには「一人一人が、自分のものの見方や考え方を持って判断し、行動することができること」や「一人一人がじっくり学習に取り組み、学ぶことの楽しさや達成感を味わわせ、自ら学ぶ意欲を育てることができるようにすること」が必要である。そのためには、知識や技能にとどまらず、資質や能力も含めた基礎・基本の定着をめざし、各教科の学習で習得した知識・技能などを活用して各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを説明や論述、対話などの言語活動を通して表現できるようにするため、学習内容や指導方法を工夫・改善し、基礎・基本の定着を図る。そこで、次のような仮説を立てた。

- ①各教科において、言語活動を充実させた授業を行えば、生徒の思考力、判断力、表現力を育むことができ、生徒が生き生きと学ぶことができる。
- ②学習内容を精選し、指導方法の工夫・改善により、知識・技能を活用する中で「基礎・基本」の定着を図れば生徒が自信をもち、生き生きと学ぶことができる。
- ③学習規律を確立し、学習環境を整えれば、落ち着きがあつて、しっかり考え、安心して発表ができる授業が展開され、生き生きと学ぶことができる。

(3) 研究組織

○校内推進体制



3 実践事例

各部会の取組

(1) 授業改善研究部

① 本年度の目標

○知識・技能の活用を図る学習活用や言語活動を授業の中への位置づけ

② 本年度の計画

○川越市教育研究会社会部授業研究発表に向けた指導案の検討と授業の実施

○「わ・た・しの授業」を意識した指導案作成と授業の実施

○授業の課題・成果のまとめ

○来年度に向けた提言のまとめ

③ 学力向上に向けた取組

○家庭学習の取組について ……家庭学習ノートの活用

○基礎学力の定着に向けた取組の検討

○積極的に発言する態度の育成

○長期休業に向けた補充学習の取組の仕方の検討

(2) 学習環境研究部

① 本年度の目標

○学ぶ意欲を引き出し、自己肯定感を高めるための学習環境を整える。

○授業規律、あいさつ、発言の仕方を見直し、主体的に授業に取り組む姿勢を育てる。

② 本年度の計画

○話し合い活動と発言の仕方の見直しと統一事項・掲示物の提案

○始業時、終業時の号令、あいさつの仕方の確認

○教室等の掲示物の見直し、統一事項の提案

○教室の整頓の仕方の工夫 ○班活動、班長会の持ち方についての提案

○道徳ノート（ワークシート）の工夫、検証 等

③ 授業規律について

○授業準備 ○あいさつの仕方 ○聞き方、話し方

(3) 情報収集部

① 本年度の目標

○アンケート内容の検討と実施する。

○アンケート結果をもとに、分析・検討をし、生徒の実態を把握する。

② 本年度の計画

○生徒からとるアンケート内容の検討と実施

○とったアンケートの分析と活用

③ アンケートの活用

○1、2学期末の生活アンケート(3つの達成目標と関連して)

○定期試験後の学習アンケート

○3つの達成目標の集計結果の公表(過去との比較を含む)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 指導案の作成にあたり、学習指導要領及び埼玉県中学校教育家庭指導資料をはじめとする県の資料等により指導法及び評価法の再確認ができた。また、今までの授業に照らし合わせて不足している点を知ることができた。
- 普段行っている授業でも、指導案を作成することにより、評価等に必要な課題が見えてきた。
- わかる授業を心がけ、今日のねらいを明確に生徒に伝えることができた。
- 授業中の生徒とのやりとりを工夫することで、生徒の思考を深め、広げることができた。
- 導入の工夫や身近なものの資料提示を行うことにより、生徒の意欲的な態度につながることができた。
- 共通理解を図り、環境を整えていく中で、教師が一体となって、取り組んでいこうという態度が生まれた。

(2) 課題

- 主体的な授業を進める中で、基礎・基本の徹底を図ることが必要である。
- 思考力、判断力、表現力を育成する場面で、十分な時間を確保をする。
- 3つの達成目標「先生の話や友達の発表をしっかりと聞き、発表することができる」の項目では、達成率が1年69.1%、2年67.3%、3年83.5%と1、2年が低かった。それぞれの教科で、より授業の改善をめざし、発表の機会を増やすとともに、発表する態度を育てていく必要がある。
- 課題を与えるだけでなく、自分で見つけられるような授業の展開を心がける。
- 本時のねらいと評価規準を明確にしていく。
- 年間指導計画の見直しを図り、各教科等で『言語活動の充実』を意識した授業を展開し、連携、共通理解を図る。
- 学力向上に向けて、家庭学習の充実を図る取組をしていく。
- アンケート内容の工夫と、生徒の実態の把握、アンケートを活用していく。
- 授業の取組や環境づくりに取り組む中で、より一層の共通理解を図る。

成果と課題はまだまだあるが、来年度の発表に向けて、成果をあげ、課題を解決していけるように、より研修を深めていきたい。